

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.275

2016年4月

平成27年度卒業式を挙



## 目次

●ニュース	
平成27年度卒業式を挙	3
フィリピンにおいてサテライトキャンパス開校式・入学式を挙	12
平成27年度「PhD プロフェッショナル登龍門」シンポジウムを開	13
短期日本語プログラム（NUSTEP）受入れを実施	13
第51回経営協議会を開	14
2015年度学生論文コンテストの表彰式を挙	14
名古屋大学全学同窓会マレーシア支部を設	15
平成27年度「赤崎賞」表彰式を挙	15
サステナブルキャンパス評価システムにおいてプラチナ認定を受け	16
本学の学生2名が日本学術振興会育志賞を受	16
卒業・修了留学生を送る夕べを開	17
松岡 信生物機能開発利用研究センター教授が日本学士院エジンバラ公賞を受	17
賞	
平成27年度退職者表彰式及び退職職員懇談会を開	18
●知の未来へ	
裁縫塾にみる女性の「学び」と現在	19
山下 廉太郎（大学院教育発達科学研究科助教）	
●知の先端	
バクテリアが持つ回転する生物ナノマシンであるべん毛モーター：	20
タンパク質で出来た分子機械	
本間 道夫（大学院理学研究科教授）	
●学生の元気	
平成27年度名古屋大学総長顕彰 6名3団体を表彰	22
平成27年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば	24
●部局ニュース	
創薬科学研究館竣工記念行事を開	27
アジア法交流館落成記念式典等を開	28
ハイデルベルク大学と合同国際シンポジウムを開	29
公開シンポジウム「教師教育における研究総合大学の役割」を開	29
モンゴル国立大学・名古屋大学レジリエンス共同研究センターの開所式を挙	30
行	
大学教育改革フォーラム in 東海 2016を開	30
催	
第63回 NUMCo を開	31
催	
第64回 NUMCo を開	31
催	
第118回防災アカデミーを開	31
催	
●資 料	
平成28年度名古屋大学組織図	32
●受賞者一覧	33
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成28年2月16日～3月15日	38
●イベントカレンダー	41
●ちょっと名大史	
農学部の安城からの移転 ― 学部の東山集結50周年 ―	44

# 平成27年度卒業式を挙





平成27年度名古屋大学卒業式が、3月25日(金)、豊田講堂において挙行されました。

午前9時30分から修士・専門職・博士学位記授与式が、続いて午前11時50分から学士学位記授与式が行われ、会場は卒業生で満員となりました。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲（ワグナー作曲）で式典が始まり、松尾総長から修士課程及び博士課程前期課程修了生1,571名に修士学位記が、大学院法学研究科専門職学位課程（法科大学院）修了生47名に専門職学位記が、医学博士課程及び博士課程後期課程修了生220名に博士学位記が、また、学部卒業生2,210名に学士学位記が、それぞれ授与されました。

総長は、修了生及び卒業生に対し、

それぞれ送別のことばを贈り、激励しました（詳しくは、総長の辞をご覧ください）。

次に、修了生及び卒業生を代表して、大学院経済学研究科博士課程前期課程修了生の加藤 諒さんが修了生総代として、また、医学部卒業生の馬渕青陽さんが学部卒業生総代として、本学への感謝の気持ちと今後の抱負等を述べました。

続いて、来賓として、名古屋大学全学同窓会副会長の宮池克人氏（中日本高速道路株式会社代表取締役社長CEO）より心のこもった祝辞をいただきました（詳しくは、来賓祝辞をご覧ください）。

最後に、名古屋大学混声合唱団が、送別の歌として学生歌「若き我等」、「青空が青かった」を合唱、続いて「蛍

の光」を全員で斉唱しました。式典は、名古屋大学交響楽団による「交響曲第1番第4楽章」（ブラームス作曲）の演奏とともに幕を閉じました。

卒業式終了後には、豊田講堂前に詰めかけた後輩たちから花束を贈られたり、胴上げをされたり、友人や後輩、保護者などと記念撮影をする卒業生の姿があちらこちらで見られました。

卒業式の様子は、豊田講堂ホワイエ及び中2階、シンポジオンホール、経済学部カンファレンスホール、また、本学ホームページ上においてライブ中継され、多くの方々がこの晴れがましい式典に臨みました。

なお、卒業式の模様は、現在、本学のホームページ（[http://www.nagoya-u.ac.jp/info/27\\_3.html](http://www.nagoya-u.ac.jp/info/27_3.html)）で視聴することができます。

# 平成27年度大学院修了式祝辞

名古屋大学総長 松尾 清一



皆さん、ご卒業、おめでとうございます。

名古屋大学は本日、学部学生2,210名と、大学院の修士及び博士課程1,838名、合わせて4,048名を送り出します。教職員を代表して、卒業される皆さんを心から祝福いたします。名古屋大学大学院において、皆さんは研究に真摯に取り組み、多くの人と知り合い、また、皆さん自身の価値を高めるためのさまざまな活動を経験しながら、数々の困難を乗り越えて本日を迎えられました。皆さんの勇気と努力に対し、大いに敬意を表します。大学院の修了にあたり、総長として皆さんに、はなむけの言葉を送りたいと思います。

皆さんには2つのことを申し上げたいと思います。

第一は、「名古屋大学卒業生であることを大きな誇りとしていただきたい」ということです。皆さんが大学院生として過ごされた名古屋大学を、改めて皆さんと一緒に振り返ってみたいと思います。名古屋大学の歴史を紐解くと、その源流は1871年（明治4年）に創設された仮医学校・仮病院にさかのぼります。この年を名古屋大学の創基としています。また、1939年に我が国で最後の帝国大学として総合大学の歴史が始まり、これを名古屋大学の開学の年としております。その後、戦後の学制改革と2004年の国立大学法人化を経て、今日に至っていますが、この間多くの先輩たちが、名古屋大学を地方の大学から国の拠点大学へ、そして日本の大学から世界の大学へと飛躍させるべく、日夜努力を重ねてきました。

名古屋大学は特に21世紀に入ってから、大きく花開きました。学術研究では、21世紀に入ってからノーベル賞を受賞した日本人13名のうち6名の方が名古屋大学関連の研究者であり、これは世界的に見ても特筆すべき事実です。また、このような素晴らしい先達（せんだつ）に続く、前途有望な若手研究者の育成にも力を入れており、素晴らしい研究成果を挙げています。一方で、名古屋大学の持つ自由闊達な雰囲気の下で教育を受けた卒業生は、産業界を中心

に素晴らしい活躍をしています。その中にはリーダーとして、日本の経済と社会をけん引する役割を担っている方も多くおられます。高い専門性と幅広い視野を身につけた皆さんが、社会の様々な領域で、勇気ある知識人としてリーダーシップを発揮することを大いに期待しています。

国際化は、世界で活躍するリーダー人材の養成を目指す名古屋大学にとって、極めて重要な柱であります。欧米の大学との積極的な交流はもとより、2000年に制定された名古屋大学学術憲章に基づき、早い時期からアジア諸国との交流にも力を注いできました。その結果、現在、名古屋大学の全学生約16,000名のうち留学生の割合は約14%に達しており、その大部分がアジアからの優秀な留学生です。

一方で、名古屋大学から海外に留学する学生も年々増加しています。皆さんの中には、すでに留学経験のある人が相当数いると思いますし、これから海外に雄飛しようという人もいるでしょう。また、国際色豊かな名古屋大学のキャンパスで海外からの留学生と知り合い、友達になった人も大勢いることでしょう。

名古屋大学は現在、ヨーロッパ、アメリカ、とりわけアジアに多くの拠点をもち、これらを活用して世界中で活発に活動をしています。私はこれまで、多くの海外拠点を訪問して、現地で活動する名古屋大学の同窓生たちと話をしました。うれしかったことは、皆さんが名古屋大学の卒業生であることを大変誇りに思い、人々の幸福や祖国の発展のために、また、名古屋大学や日本との懸け橋となるために、懸命に努力している様子が肌で伝わってきたことです。

これまでの歴史の中で、名古屋大学から巣立った卒業生は、社会の様々な領域で活躍し、日本のみならず世界の人々の幸福の実現と人類社会の発展のために大きく貢献しています。皆さんも、これからその仲間の一人になっていくのです。卒業される皆さんは、このような素晴らしい環境の下で学生生活を送ってきたことを改めて深く胸に刻



み、名古屋大学の卒業生であることを、一生の誇りにしていただきたいと思います。そして、これまで身に着けた能力に自信を持ち、皆さん自身の課題に果敢にチャレンジしてください。

さて、第二のメッセージは、「多様性の許容と、共働による創造」という視点持っていただきたい、ということです。日本と世界は今、かつてない困難な課題に直面しています。科学や技術の進歩は人類の生活を一変させ、多くの恩恵をもたらしましたが、歴史を振り返りつつ今日の状況をつぶさに見てみると、それだけでは解決しない重大な問題があることを我々は率直に認めざるを得ません。

気候変動、環境破壊、高齢化、貧困と格差の拡大、経済危機、健康・医療問題、新たな感染症の流行、地域紛争等々、人類の持続的な発展を阻害する可能性のある、極めて深刻な問題が山積しているのです。これらの問題にどうチャレンジし、解決していくのか。我々に課せられた大きな課題です。その時に持っていただきたい視点が「多様性の許容と、共働による創造」です。

多様性を許容するということは、容易なことではありません。相手を理解し受け入れる。次に、自分のことを相手に理解してもらう。お互いを明確に理解し許容したうえで、お互いの欠点を補いあい、また、長所をさらに活かしながら、共通の目的に向かってアクション（共働）する。多様な人や文化を理解し、許容し、そして共働する、というステップを何度も繰り返しながら、ヒューマンネットワークを豊かにして、最終的には共働することによって、創造的な仕事を成し遂げることが可能になると思います。

このような作業は時間もかかりますし、多大な労力も必要になるでしょう。しかし、いったんこのような関係が構築できれば、そこから生み出される産物はこれまでにない創造的でイノベティブなものとなるでしょう。なぜなら、異質なものが共同作業をすることで、お互いの欠点を

補いあい、豊かな発想と新しい価値の創造が可能になるからです。

名古屋大学では、多様な人たちが日々の教育・研究活動に参加し、従来の壁を打ち破るような様々な試みを実践しています。すなわち、異なる領域の研究者の共働、大学と産業界との連携、男女共同参画の推進、留学生の積極的受け入れ、海外の大学との交流推進、等々です。これらはすべて名古屋大学の挑戦であり、このような取り組みを一層進めることにより、名古屋大学は真の意味で、人類の幸福と持続的に発展可能な社会の実現に、創造的に貢献できるものと考えます。

名古屋大学で学んだ皆さんには、社会貢献の高い志、幅広い視野、多様性の許容と共働、コミュニケーション能力など、創造やイノベーションを引き起こすリーダーとしての資質をもつことが期待されています。これらは一朝一夕に身につくものではありませんが、皆さんは名古屋大学において、その基礎を学び、具体的な体験もしたものと思います。このような基礎の上にたち、「多様性の許容と、共働による創造」という視点をもって、卒業後も皆さん自身に一層磨きをかけていただきたいと切に願う次第です。言うまでもありませんが、これまで名古屋大学での皆さんの活動が可能であったのは、広範な国民の皆さまの支援と、また、名古屋大学基金をはじめ様々なプロジェクトを通じてご支援をいただいた多くの企業や個人の協力があってこそであります。そのような多くの人々の思いも、ぜひ心に刻んでおいていただきたいと思います。

皆さんのこれからの人生が希望に満ちた充実したものになるよう、祈りつつ、私からのお祝いの言葉といたします。卒業、おめでとう。

# 平成27年度学部卒業式祝辞

名古屋大学総長 松尾 清一



皆さん、ご卒業、おめでとうございます。

名古屋大学は本日、学部学生2,210名と、大学院の修士及び博士課程1,838名、合わせて4,048名を送り出します。教職員を代表して、卒業される皆さんを心から祝福いたします。名古屋大学入学の日から今日まで、皆さんは勉学に励み、多くの人と知り合い、また、皆さん自身の価値を高めるためのさまざまな活動を経験しながら、本日を迎えられました。その間、多くの困難があったと思いますが、それらを乗り越えてきた皆さんの勇気と努力に対し、大いに敬意を表します。卒業にあたり、総長として皆さんに、はなむけの言葉を送りたいと思います。

皆さんには2つのことを申し上げたいと思います。第一は、「名古屋大学卒業生であることを大きな誇りとしていただきたい」ということです。皆さんが学生として過ごしてきた名古屋大学を、皆さんと一緒に振り返ってみたいと思います。名古屋大学の歴史を紐解くと、その源流は1871年（明治4年）に創設された仮医学校・仮病院にさかのぼります。この年を名古屋大学の創基としています。また、1939年に我が国で最後の帝国大学として総合大学の歴史が始まり、これを名古屋大学の開学の年としております。その後、戦後の学制改革と2004年の国立大学法人化を経て、今日に至っていますが、この間多くの先輩たちが、名古屋大学を地方の大学から国の拠点大学へ、そして日本の大学から世界の大学へと飛躍させるべく、日夜努力を重ねてきました。

名古屋大学は特に21世紀に入ってから、大きく花開きました。学術研究では、21世紀に入ってからノーベル賞を受賞した日本人13名のうち6名の方が名古屋大学関連の研究者であり、これは世界的に見ても特筆すべき事実です。また、このような素晴らしい先達（せんだつ）に続く、前途有望な若手研究者の育成にも力を入れており、素晴らしい研究成果を挙げています。学部卒業後、大学院に進学する人も多くいると思いますが、ぜひ、果敢に研究に挑戦して

いただきたいと思います。

一方で、名古屋大学の持つ自由闊達な雰囲気の下で教育を受けた卒業生は、これまで産業界を中心に素晴らしい活躍をしています。その中にはリーダーとして、日本の経済と社会をけん引する役割を担っている方も多くおられます。これから社会に旅立っていく諸君には、名古屋大学で培った様々な能力をいかに発揮して、リーダーとして活躍していただきたいと思います。

国際化は、世界で活躍するリーダー人材の養成を目指す名古屋大学にとって、極めて重要な柱であります。欧米の大学との積極的な交流はもとより、2000年に制定された名古屋大学学術憲章に基づき、早い時期からアジア諸国との交流にも力を注いできました。その結果、現在、名古屋大学の全学生約16,000名のうち留学生の割合は約14%に達しており、その大部分がアジアからの優秀な留学生です。

一方で、名古屋大学から海外に留学する学生も年々増加しています。皆さんの中には、すでに留学経験のある人がいると思いますし、国際色豊かな名古屋大学のキャンパスで海外からの留学生と知り合い、友達になった人も大勢いることでしょう。

名古屋大学は現在、ヨーロッパ、アメリカ、とりわけアジアに多くの拠点をもち、これらを活用して世界中で活発に活動をしています。私はこれまで、多くの海外拠点を訪問して、現地で活動する名古屋大学の同窓生たちと話をしました。うれしかったことは、皆さんが名古屋大学の卒業生であることを大変誇りに思い、人々の幸福や祖国の発展のために、また、名古屋大学や日本との懸け橋となるために、懸命に努力している様子が肌で伝わってきたことです。

これまでの歴史の中で、名古屋大学から巣立った卒業生は、社会の様々な領域で活躍し、日本のみならず世界の人々の幸福の実現と人類社会の発展のために大きく貢献しています。皆さんも、これからその仲間の一人になっていくのです。卒業される皆さんにはぜひ、このような素晴ら



しい環境の下で学生生活を送ってきたことを改めて深く胸に刻み、名古屋大学の卒業生であることを、一生の誇りにしていただきたいと思います。そして、これまで身に着けた能力に自信を持ち、皆さん自身の課題に果敢にチャレンジしてください。

さて、第二のメッセージは、「多様性の許容と、共働による創造」という視点を持っていただきたい、ということです。日本と世界は今、かつてない困難な課題に直面しています。科学や技術の進歩は人類の生活を一変させ、多くの恩恵をもたらしましたが、歴史を振り返りつつ今日の状況をつぶさに見てみると、それだけでは解決しない重大な問題があることを我々は率直に認めざるを得ません。

気候変動、環境破壊、高齢化、貧困と格差の拡大、経済危機、健康・医療問題、新たな感染症の流行、地域紛争等々、人類の持続的な発展を阻害する可能性のある、極めて深刻な問題が山積しているのです。これらの問題にどうチャレンジし、解決していくのか。我々に課せられた大きな課題です。その時に持っていただきたい視点が「多様性の許容と、共働による創造」です。

多様性を許容するということは、容易なことではありません。相手を理解し受け入れる。自分のことを相手に理解してもらおう。お互いを明確に理解し許容したうえで、お互いの欠点を補いあい、また、長所をさらに活かしながら、共通の目的に向かってアクション（共働）する。多様な人や文化を理解し、許容し、そして共働する、というステップを何度も繰り返しながら、ヒューマンネットワークを豊かにして、最終的には共働することによって、創造的な仕事を成し遂げることが可能になると思います。

このような作業は時間もかかりますし、多大な労力も必要になるでしょう。しかし、いったんこのような関係が構築できれば、そこから生み出される産物はこれまでにない創造的でイノベティブなものとなるでしょう。なぜなら、異質なものが共同作業をすることで、お互いの欠点を

補いあい、豊かな発想と新しい価値の創造が可能になるからです。

名古屋大学では、多様な人たちが日々の教育・研究活動に参加し、従来の壁を打ち破るような様々な試みを実践しています。すなわち、異なる領域の研究者の共働、大学と産業界との連携、男女共同参画の推進、留学生の積極的受け入れ、海外の大学との交流推進、等々です。これらはすべて名古屋大学の挑戦であり、このような取り組みを一層進めることにより、名古屋大学は真の意味で、人類の幸福と持続的に発展可能な社会の実現に、創造的に貢献できるものと考えます。

名古屋大学で学んだ皆さんには、社会貢献の高い志、幅広い視野、多様性の許容と共働、コミュニケーション能力など、創造やイノベーションを引き起こすリーダーとしての資質をもつことが期待されています。これらは一朝一夕に身につくものではありませんが、皆さんは名古屋大学において、その基礎を学び、具体的な体験もしたものと思います。このような基礎の上にたち、「多様性の許容と、共働による創造」という視点をもって、卒業後も皆さん自身に一層磨きをかけていただきたいと切に願う次第です。

言うまでもありませんが、これまで名古屋大学での皆さんの活動が可能であったのは、広範な国民の皆さまの支援と、また、名古屋大学基金をはじめ様々なプロジェクトを通じてご支援をいただいた多くの企業や個人の協力があったからこそであります。そのような多くの人々の思いも、ぜひ心に刻んでおいていただきたいと思います。

皆さんのこれからの人生が、希望に満ちた充実したものになるよう祈りつつ、私からのお祝いの言葉といたします。卒業、おめでとう。

## 来賓祝辞（大学院修了式）

宮池 克人 名古屋大学全学同窓会副会長  
中日本高速道路株式会社代表取締役社長 CEO



ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会副会長の宮池でございます。

本日は修了式にお招きいただき、ありがとうございます。

まずもって、本日大学院を修了された皆さんお一人おひとりに心よりお祝い申し上げます。

皆さんは、これから官公庁・会社など、それぞれの進路へ進まれるわけであります。

私は、本学で学び、その後40有余年にわたり、企業に勤めて参りました。企業では、毎年新入社員の方々をお迎えしておるわけですが、そこでは入社時に、一応の新入社員教育を行ったのち、第一線の事業場で実務を学びながら、あわせて人材育成のための研修を行い、企業の求める人材を育成していくのが、一般的なやり方です。

皆さんは実務経験と人材育成研修を通じて、一人前の企業人に育っていくわけであります。

そこで、社会へ出られる皆さんにぜひ心掛けていただきたいことがあります。これから企業人として成長していく過程において、与えられた課題を要領よく片付けることは大切でありますが、優秀な皆さんにおかれましては十分ご

承知のことと存じますが、与えられた目先の課題を要領よくこなすことで満足するのではなく、更なる高みを目指すことを常々心掛けていただきたいと思います。自立した一人の人間として、更なる高みを目指し、自ら考え自ら行動する姿勢をいつも持ち続けていただきたいと思います。

企業の求める人材とは、言われたこと、与えられたことを要領よくこなすことは、必要にして最少の要件であって、更なる高みを目指し自ら仕事を創造していくことのできる人です。

これまで皆さんが過ごしてこられた20数年間とは異なる競争の世界が始まります。そこでは、自ら考え、自ら行動し高みを目指すということが、基本原理であります。皆さんのご健闘を期待しております。

さて、名古屋大学は、現在、松尾清一総長のリーダーシップのもと、NU MIRAI 2020「名古屋大学を世界屈指の研究大学に」という松尾イニシアティブに従って、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究推進をはじめとする、大学の国際化を強力に推し進めておられます。

名古屋大学全学同窓会は、同窓会を通じて卒業生が母校





のつながりを大切にしながら活躍していただき、大学が社会に開かれ、国内外において、名古屋大学の名声を高めるべく母校を応援するという、確かな関係をしっかり築いていくことが大切です。

名古屋大学全学同窓会は、豊田章一郎さんを会長に平成14年に発足し、13年が経過いたしました。これまで、関東・関西各支部、遠州会の3つの国内支部がございます。また海外には、名古屋大学で学ばれた留学生の方々を中心となりまして、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピンそしてマレーシアと全部で15の支部を設立しております。

今後、名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る際の拠点として、これらの同窓会支部との交流を積極的に進めているところです。

全学同窓会では、名古屋大学を支援するため、「名古屋大学基金」をはじめ、同窓会カードとして、年会費永年無料の「名古屋大学カード」を発行しております。これを機に、ぜひカードに入会していただき、名古屋大学支援にご

協力をいただきたいと思います。

自由闊達、清新な学風、また大学関係者から6名のノーベル賞受賞者が輩出された名古屋大学の卒業生として、自信と誇りをもって、これからの人生を歩んでいただきたいと思います。

皆さんがこれから社会で活躍されるなかで、さまざまな難題を解決していかななくてはならない場面に遭遇することもありましょう。そういうときは、名古屋大学は大きな力を与えていただけるかもしれません。名古屋大学に駆け込み、教えを乞うことも大切です。全学同窓会はそういう皆さんを応援しております。

私も、本学を卒業し、40有余年、何度も駆け込んで、お知恵をお借りし、助けていただきました。

名古屋大学は、これまでと同様、卒業後も頼りになる母校であっていただけるよう、教員はじめ関係各位にお願い申し上げます。そして、大学院を修了された皆さんが、大きく今後の人生をはばたかれんことを祈念し、祝辞とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。



## 来賓祝辞 (学部卒業式)

宮池 克人 名古屋大学全学同窓会副会長  
 中日本高速道路株式会社代表取締役社長 CEO

ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会副会長の宮池でございます。

本日は卒業式にお招きいただき、ありがとうございます。

まずもって、本日卒業された皆さんお一人おひとりから心よりお祝い申し上げます。

皆さんは、これから官公庁・会社・大学院など、それぞれの進路へ進まれるわけであります。

私は、本学で学び、その後40有余年にわたり、企業に勤めて参りました。企業では、毎年新入社員の方々をお迎えしておるわけですが、そこでは入社時に、一応の新入社員教育を行ったのち、第一線の事業場で実務を学びながら、あわせて人材育成のための研修を行い、企業の求める人材を育成していくのが、一般的なやり方です。

皆さんは実務経験と人材育成研修を通じて、一人前の企業人に育っていくわけであります。

そこで、社会へ出られる皆さんにぜひ心掛けていただきたいことがあります。これから企業人として成長していく過程において、与えられた課題を要領よく片付けることは大切でありますが、優秀な皆さんにおかれましては十分ご

承知のことと存じますが、与えられた目先の課題を要領よくこなすことで満足するのではなく、更なる高みを指すことを常々心掛けていただきたいと思います。自立した一人の人間として、更なる高みを指し、自ら考え自ら行動する姿勢をいつも持ち続けていただきたいと思います。

企業の求める人材とは、言われたこと、与えられたことを要領よくこなすことは、必要にして最少の要件であって、更なる高みを指し自ら仕事を創造していくことのできる人です。

これまで皆さんが過ごしてこられた20数年間とは異なる競争の世界が始まります。そこでは、自ら考え自ら行動し高みを指すということが、基本原理であります。皆さんのご健闘を期待しております。

さて、名古屋大学は、現在、松尾清一総長のリーダーシップのもと、NU MIRAI 2020「名古屋大学を世界屈指の研究大学に」という松尾イニシアティブに従って、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究推進をはじめとする、大学の国際化を強力に推し進めておられます。



名古屋大学全学同窓会は、同窓会を通じて卒業生が母校のつながりを大切にしながら活躍していただき、大学が社会に開かれ、国内外において、名古屋大学の名声を高めるべく母校を応援するという、確かな関係をしっかり築いていくことが大切です。

名古屋大学全学同窓会は、豊田章一郎さんを会長に平成14年に発足し、13年が経過いたしました。これまで、関東・関西各支部、遠州会の3つの国内支部がございます。また海外には、名古屋大学で学ばれた留学生の方々を中心となりまして、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピンそしてマレーシアと全部で15の支部を設立しております。

今後、名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る際の拠点として、これらの同窓会支部との交流を積極的に進めているところです。

全学同窓会では、名古屋大学を支援するため、「名古屋大学基金」をはじめ、同窓会カードとして、年会費永年無料の「名古屋大学カード」を発行しております。これを機



に、ぜひカードに入会していただき、名古屋大学支援にご協力をいただきたいと思います。

自由闊達、清新な学風、また大学関係者から6名のノーベル賞受賞者が輩出された名古屋大学の卒業生として、自信と誇りをもって、これからの人生を歩んでいただきたいと思います。

皆さんがこれから社会で活躍されるなかで、さまざまな難題を解決していかななくてはならない場面に遭遇することもありましょう。そういうときは、名古屋大学は大きな力を与えていただけるかもしれません。名古屋大学に駆け込み、教えを乞うことも大切です。全学同窓会はそういう皆さんを応援しております。

私も、本学を卒業し、40有余年、何度も駆け込んで、お知恵をお借りし、助けていただきました。

名古屋大学は、これまでと同様、卒業後も頼りになる母校であっていただけるよう、教員はじめ関係各位にお願い申し上げます。そして、卒業生の皆さんが、大きく今後の人生をはばたかれんことを祈念し、祝辞とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。



## フィリピンにおいてサテライトキャンパス開校式・入学式を挙



記念撮影

名古屋大学フィリピンサテライトキャンパス開校式及び「アジア諸国の国家中枢人材養成プログラム」入学式が3月8日(火)、フィリピンにおいて挙行されました。本プログラムは、各国政府幹部及び将来の国のリーダーとして活躍が期待されている若手を対象に、現地サテライトキャンパスと本学本邦キャンパスの連携の下、現地教員による教育研究指導やICTを利用した遠隔教育、本邦での短期スクーリングによる質の高い博士課程教育を行います。

フィリピンサテライトキャンパスは、カンボジア、ベトナム、モンゴル、ウズベキスタン、そしてラオスに続く6番目の開校となり、大学院生命農学研究科及び大学院国際開発研究科がサテライトキャンパスを通してプログラムを提供します。サテライトキャンパスが設置されているフィリピン大学ロスバニョス校(UPLB)は、国際稲研究所(IRRI)、東南アジア教育大臣機構農学高等教育・研究地域センター(SEAMEO-SEARCA)、東南アジア諸国連合

生物多様性センター(ACB)などの国際機関が同キャンパスに隣接して本部を置く国際的研究環境と、東南アジア諸国の人材育成の場という2つの大きな特徴を持っています。本学の国際的な共同研究やASEANの人材育成といった、更に幅広いアジア展開が期待されています。式典には、本学から松尾総長、渡辺理事、市橋理事、磯田アジアサテライトキャンパス学院長をはじめ、関係部局の教職員が出席し、来賓には内田フィリピン日本大使館公使、パスカルフィリピン大学機構長、フィリピン各地の国立大学・公立大学の学長他、文部科学省、国際協力機構(JICA)、国際交流基金(Japan Foundation)といった多くの関係者が臨席しました。総長挨拶、来賓祝辞、アジアサテライトキャンパス学院紹介、研究科紹介の後、生命農学研究科に入学するロニロO.デカストロさんがこれから始まる研究への意気込みを語りました。



あいさつする磯田学院長



あいさつするパスカルフィリピン大学機構長

## 平成27年度「PhD プロフェッショナル登龍門」シンポジウムを開催

博士課程教育リーディングプログラム「PhD プロフェッショナル登龍門」(PhD 登龍門)の平成27年度シンポジウム「社会に羽ばたく博士人材の育成－博士人材の育成手法の評価方法論－」が、2月17日(水)、名鉄ニューグランドホテルにおいて開催されました。

開会にあたり佐々木康晴日本学術振興会企画官から、本



講演の様子

プログラムへの期待の言葉があいさつとして述べられ、次いで、本学を代表して松尾総長からあいさつがありました。

第1部「博士人材の育成手法の評価方法論－大学改革における博士人材育成の国際比較－」では、Nature Indexのデイビッド・スウィンバンクス氏、依田高典京都大学教授、藤巻副理事の3名から、それぞれ評価指標等についてデータベースや研究成果を基にした講演が行われ、博士人材の育成について論点が提示されました。その後のパネルディスカッションでは、博士人材の育成方法について、海外の事例を含め活発な議論が展開され、人材育成の取り組みや評価手法を共有できるような大学横断型コンソーシアムの設立など、示唆に富む多数の意見が述べられました。

また、第2部「名古屋大学 PhD 登龍門の取り組み」では、これまでの PhD 登龍門の取り組みについて、杉山コーディネータからの説明とともに、新たにスタートしたノースカロライナ・アンビション・キャンプについて、現地で指導にあたったノースカロライナ州立大学のマイケル・バックル氏より「ものづくり」の現場で企業家精神を学ぶ意義などのお話があり、参加した学生からの発表のほか、会場からの質問、意見も多く寄せられました。

## 短期日本語プログラム (NUSTEP) 受入れを実施

「短期日本語プログラム (NUSTEP)」による第1回の学生受け入れが2月4日(木)から18日(木)の間、実施されました。NUSTEPは、平成26年度に採択されたスーパーグローバル大学創成支援構想の下で実施される2週間のプログラムであり、国際教育交流センター主催により、2月と7月の年2回の開校を予定しています。初めての受け入れとなる今回は、韓国・中国・台湾・ベトナム・オースト

リア・フランスの協定校から28名の学部生を受け入れました。

期間中、午前には日本語学習、午後には日本の文化・社会について理解を深めるための活動や、本学の教育・研究を体験する活動を行いました。今回は、専門講義の受講や学内研究施設の見学、着付け・書道体験、トヨタ産業技術記念館の見学、キャリア探求ワークショップ、本学の学生との交流会など、多岐にわたる活動を行いました。また、週末を利用し、6日(土)は瀬戸・犬山へのフィールドトリップ、13日(土)、14日(日)はホームステイ(希望者のみ)も行いました。最終日にはプログラムの総まとめとして、様々な活動を通して深まった「日本」についての自身の考えを日本語で発表し、その内容の深さと堪能な日本語力で聴衆として参加した本学の学生やホストファミリーの方々を驚かせていました。

プログラム中、参加学生は、様々な国からの参加者や本学の学生との交流を深め、将来につながるネットワークを形成する上でも貴重な機会となりました。また、「短期間であったが、日本語の運用力が向上した」、「将来、名古屋大学の大学院に進学したい」などの声も寄せられました。



記念撮影

## 第51回経営協議会を開催

第51回経営協議会が、2月18日(木)、鶴舞地区の鶴友会館において開催されました。

会議では、松尾総長からあいさつの後、人事院勧告への対応等、第3期中期目標・中期計画、教育研究組織の改編、大学院理学研究科とエジンバラ大学との国際連携理学専攻の設置、平成28年度運営費交付金の予算内示及び平成28年



会議の様子

度学内予算編成方針(案)、土地交換による不動産取得について、総長、各担当理事及び副総長から説明が行われ、審議の結果、了承されました。

次いで、平成26年度会計検査院決算検査報告、平成28年度名古屋大学若手育成プログラム(YLC)の採択結果、第6回(平成27年度)日本学術振興会育志賞、名古屋大学基金について報告が行われました。

また、懇談として、本学における財務状況に関して意見交換がなされ、外部委員の方々から貴重なご意見が寄せられました。

## 2015年度学生論文コンテストの表彰式を挙

2015年度学生論文コンテストの表彰式が、2月19日(金)、中央図書館会議室において挙行されました。本コンテストは、論理的な文章を書く経験を奨励することを目的として、2007年度から毎年開催されているものです。

今年度は、松下理事、森附属図書館長、戸田山教養教育院長、水谷高等教育研究センター長による審査の結果、佳

作1件が選出されました。

表彰式では、表彰状ならびに副賞の授与と記念撮影の後、審査員からの受賞論文に関する講評や受賞者からのコメントが述べられました。協賛の名古屋大学消費生活協同組合及びコクヨマーケティング株式会社からもご臨席があり、和やかな歓談が行われた後、お開きとなりました。

なお、受賞論文は、本学の研究成果物として名古屋大学学術機関リポジトリに登録されます。



表彰式における記念撮影(中央が牧野さん)

### 佳作

「なぜセンター試験は廃止されるのか 大学入試改革について」

経済学部1年 牧野 恵美

## 名古屋大学全学同窓会マレーシア支部を設立

名古屋大学全学同窓会マレーシア支部設立総会が2月21日(日)、マレーシア首都クアラルンプールのホテルにおいて開催されました。15番目の全学同窓会海外支部となるマレーシアでは、1990年代後半以降でも110名を超える本学への留学経験者、47名の現役学生がいます。設立総会には、本学から松尾総長、三枝教育推進部長をはじめ関係職員、



記念撮影

伊藤義人全学同窓会代表幹事が出席し、マレーシア側からは本学への留学経験者約20名が出席しました。

総会は、本学の国際言語文化研究科修士生であるジャミラマラヤ大学上級講師の流暢な日本語での司会による開会宣言が述べられた後、総長から、日本語と英語によるあいさつがあり、今回の支部設立へのお祝いのことばと、「NUMIRAI 2020」をはじめとする最近の本学の情勢について、また、今後も多くの留学生を受け入れ、アジア諸国との交流に貢献するため、マレーシア支部の支援に期待する旨が述べられました。

次に、伊藤代表幹事から豊田章一郎全学同窓会会長の祝意の伝達などのあいさつがあり、その後、支部認定書と支部旗が、総長から本学の工学研究科修士生であるナファリザル支部長に手渡されました。

その後、ナファリザル支部長から就任あいさつがあり、マレーシア支部設立へ向けた昨年春からの準備過程や、多民族国家のマレーシアの利点を活かして、ハラルフードなどの扱いなど、本学及び全学同窓会に協力したい旨が述べられました。引き続き11名の支部役員の紹介があり、その後、支部旗と一緒に参加者全員の記念撮影が行われました。

## 平成27年度「赤崎賞」表彰式を挙行

平成27年度「赤崎賞」表彰式が、2月24日(水)、本部1号館第2会議室において挙行されました。同賞は、本学の若手研究者に対して、科学の発展と社会に多大な貢献をされてきた赤崎 勇特別教授の偉業を広く伝えるとともに、産学官連携を通じた研究開発の一層の発展を促進することを目的として、平成22年度に設けられた顕彰制度であり、



赤崎特別教授、受賞者を囲んで記念撮影

赤崎特別教授が平成21年に京都賞を受賞した記念として本学に寄贈いただいた寄附金により運用されています。

本賞は、本学に在籍する35歳以下の学生及び研究者の中から、学術・科学技術分野で将来的な発展や可能性が期待でき、本学の学術・科学技術水準の高さを内外に知らしめることができる研究を行っている方を対象としています。今回は8件の応募があり、学術研究・産学官連携推進本部長らを委員とした赤崎特別顕彰審査委員会が厳正な審査を行った結果、安井隆雄工学研究科助教(研究テーマ:自己組織化ナノワイヤ構造体を用いた超早期がん診断技術の開発)が受賞者に選ばれました。

表彰式では、松尾総長のあいさつの後、審査委員会委員長代理である新美工学研究科長から受賞者の発表と講評があり、次いで、赤崎特別教授から受賞者に正賞の表彰状と副賞の目録が贈呈されました。

受賞者からは、自身の研究が本学の学術研究のさらなる向上の一端を担い、『研究に王道なし』という赤崎特別教授のお言葉を深く理解できる研究者となれるよう、今後も努力を重ねていきたい旨、受賞の喜びとともに赤崎特別教授に対する尊敬の念を込めた謝辞がありました。

## サステナブルキャンパス評価システムにおいてプラチナ認定を受ける

サステナブルキャンパス評価システムレーティング制度により、本学が全国で唯一のプラチナ認定を受けました。これは、サステナブルキャンパス推進協議会（CAS-Net JAPAN）が実施した平成26、27年度の2度にわたるサステナブルキャンパスの評価であり、今年度から4段階の評価を行うレーティング制度が導入され「プラチナ」、「ゴ

ルド」、「シルバー」、「ブロンズ」の評価が設けられました。

今回、本学は170にも及ぶ評価基準のうち88%の得点率を獲得し、プラチナの認定を受けました。赤崎 勇特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授の青色発光ダイオードの発明を筆頭とする省エネルギーに寄与する研究活動、「NU MIRAI 2020」や「キャンパスマスタープラン」等の確固たる環境方針や、環境報告書作成を通じた省エネや廃棄物管理といった全学的なキャンパスでのサステナビリティ推進活動、エネルギーマネジメント研究・検討会やファシリティマネジメント研究会等の広く外部機関と連携した活動、あいちサイエンス・コミュニケーションや環境教育セミナー、公開講座による地域サービス活動、さらには減災連携研究センターの実施する地域防災活動などすべてが評価され認定に至りました。

なお、2月29日(月)には、京都大学においてサステナブルキャンパス推進協議会が開催されました。本学からは恒川和久工学部施設整備推進室准教授、村田環境安全衛生管理室長、松田施設企画課長が出席し認定証の交付を受けました。本認定は3年間有効ですが、今後さらなるサステナブルなキャンパスに向けて活動を進めていきます。



認定証交付の様子（右が恒川准教授）

## 本学の学生2名が日本学術振興会育志賞を受賞

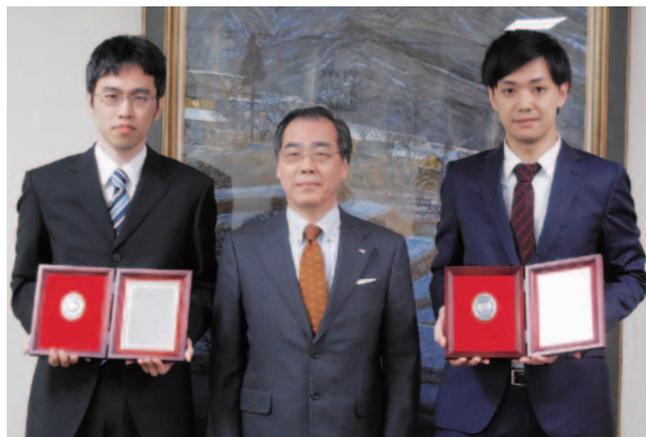
大学院理学研究科の武藤 慶さん（平成27年9月修了）と竹川宜宏さん（平成27年8月修了）が、日本学術振興会育志賞を受賞しました。同賞は、将来我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することで、若手研究者の養成を図ることを目的としており、平成22年度に創設されました。第6回となる

今年度は、全国の大学・学会から推薦された150名の中から、18名が受賞者として決定されました。

なお、授賞式は3月2日(水)に日本学士院において挙行されました。受賞者とその研究課題は以下のとおりです。

武藤 慶 大学院理学研究科  
 ・研究課題：炭素-水素、炭素-酸素、炭素-炭素結合の活性化に基づく分子連結反応の開拓

竹川 宜宏 大学院理学研究科  
 ・研究課題：細菌べん毛モーター固定子-回転子間相互作用と回転エネルギー変換に関する研究



総長への受賞報告後の記念撮影（左が竹川さん、右が武藤さん）

## 卒業・修了留学生を送る夕べを開催

平成27年度卒業・修了留学生を送る夕べが、3月14日(月)、南部生協において開催されました。この送る夕べは、3月末で本学を卒業・修了する留学生の今後の活躍を祈念するとともに、日頃留学生がお世話になっている各種財団等の関係者やボランティア団体関係者等を招き、これらの方々と関係教職員、留学生の一層の相互理解・交流を深め



総長を囲んでの記念撮影

ることを目的としています。当日は、来賓、留学生、教職員など約180名の参加がありました。

松尾総長のあいさつで始まり、来賓の杉山洋一一般財団法人日本ガイシ留学生基金事務局長から卒業・修了留学生に対するお祝いのことばが述べられました。続いて、渡辺理事による乾杯の発声後、懇談に移り、留学生が総長や教職員を囲んで、にこやかに歓談したり、記念撮影をする姿が会場のあちらこちらで見られました。また、名古屋大学留学生後援会から、卒業・修了留学生に対して記念品の贈呈があり、町田国際教育交流センター長から各部局の卒業・修了留学生代表に、記念品が手渡されました。続いて、卒業生・修了生を代表して、教育発達科学研究科のスマイチ・アルヴィンさん(スウェーデン)と環境学研究科のチダモズィ・クララ・リンビツォ(マラウイ共和国)さんが、それぞれ本学での思い出と今後の抱負を述べました。卒業・修了留学生たちの、将来の活躍が期待されます。

## 松岡 信生物機能開発利用研究センター教授が日本学士院 エジンバラ公賞を受賞

松岡 信生物機能開発利用研究センター教授が日本学士院エジンバラ公賞を受賞しました。この賞は、日本学士院の名誉会員であるエジンバラ公フィリップ殿下の申し出により創設されたものであり、広く自然保護及び種の保全の基礎となるすぐれた学術的成果を挙げた者に対して授与されます。

今回、松岡教授の授賞対象となった研究題目は、「植物ホルモン・ジベレリンがもたらす種の保全確保と植物多様性ならびに食糧生産性向上に関する研究」です。



松岡教授

## 平成27年度退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催

平成27年度名古屋大学退職者表彰式が、3月30日(水)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。表彰式は、平成28年3月31日付けで退職する勤続30年以上の職員を表彰するもので、当日は、受表彰者19名のうち11名の職員が出席し、総長代理である松下理事から受表彰者一人ひとりに表彰状が手渡されました。続いて、松下理事から祝辞があり、



表彰状授与の様子

永年にわたる本学への尽力に対する感謝の言葉がありました。

引き続き、ユニバーサルクラブにおいて、名古屋大学退職職員懇談会が開催され、上記の受表彰者のほか、関係部局の職員が出席しました。松下理事のあいさつの後、退職職員を代表して引字勝美環境学研究科事務長から謝辞がありました。懇談会では、退職職員が出席者と今日までの思い出などを語り、別れを惜しんでいました。

## 裁縫塾にみる女性の「学び」と現在

大学院教育発達科学研究科助教  
山下 廉太郎

それらを紐解いていくと、必ずしも「花嫁修行」に収斂されない裁縫塾の実態が明らかとなります。例えば、上級学校へと進学する過程のなかで裁縫塾を利用する女性、裁縫科教員を目指して裁縫塾に入門する女性たちの存在です。そして、そうした女性たちに着目すると、働く女性、既婚の女性や子育てが一段落した女性が意外にも多いということに気が付きます。もちろん、こうした女性たちはさまざまな「障壁」を乗り越えて「学び」を継続していたと考えられます。

このことは単に教育史研究にとどまらずに、現代の女性に対する支援を考える上で、重要な知見を与えてくれます。例えば、現在では働く女性への支援あるいは制度が整備されつつありますが、実際に制度や支援を活用する際にはまだまだ「障壁」が存在しているかもしれません。そうした現状を少しでも改善するための歴史的材料を提供することも自身の研究に含まれた課題と言えそうです。

明治5(1872)年の「学制」発布以降、近代公教育が普及していくなか、私教育のはたした社会的役割を明らかにすることが私の研究の目的です。具体的には、女子(女性)教育の場として各地域に数多く定着していた裁縫塾を研究の対象に据え、その実態を明らかにすることで、近代女子(女性)教育の再検討を試んでいます。

こうした研究の起点には次のような理由が存在します。それは学校以外の女子(女性)教育の担い手として裁縫塾の存在を指摘する研究はあるものの、その内容や社会的役割を具体的に析出したものは皆無に等しいという点です。このことは従来の研究の関心が近代学校へと集約されてしまった結果、裁縫塾の実態を解明することなく、裁縫塾像を抽象的に構築してしまっているという問題へと帰結しています。その一端を提示すると、裁縫塾における教育は「花嫁修行」という言説に象徴されるように、先入観としてほぼ固定化されていることが挙げられます。

さて、こうした現状のなか、史資料を博索して



明治35(1902)年の大津裁縫塾の師匠(前より2列目中央)と門人たち(大津家所蔵)。後列になるにしたがい年齢層が高くなっている。

# 細菌が持つ回転する生物ナノマシンであるべん毛モーター： タンパク質で出来た分子機械

本間 道夫 大学院理学研究科教授

微生物は顕微鏡を使って、拡大しなくては見る  
ことのできない生物である。そのなかでも、バク  
テリア、あるいは細菌とよばれるものは、人や動  
物に病気を起こしたり、アミノ酸や酢の産生に使  
われたり、遺伝子操作の道具として用いられたり  
している。私が研究対象としているのは、この細  
菌の持つべん毛という運動器官である。運動する  
ためには、当然、エネルギーが必要である。筋肉  
や精子の鞭毛などの運動には、ATPという高エ  
ネルギーリン酸結合をもった化学物質が使われ  
る。同じべん毛という名前をもつ細菌のべん毛  
は、膜を介したイオンの流れをエネルギー源と  
して運動する。膜を介したイオンのエネルギーは、  
イオン駆動力と呼ばれ、ATPの合成の際に使わ  
れるエネルギー源であることが知られている。

細菌は、菌体の外に突き出たらせん型べん毛繊  
維をスクリューのように回転させて運動する。推  
進力を生み出すべん毛繊維は細菌の体長の数倍も

の長さで、その根元にある膜に埋まったモーター  
により回転している（図1）。このモーター部分  
こそが、この生物が生み出したタンパク質で作ら  
れたナノマシンである。べん毛は、部品である  
様々なタンパク質で構築された生物機械といっ  
てもいいのかも知れない。そして、実は生物界に  
おいて唯一の膜超分子回転運動器官でもある。こ  
の生物機械のエネルギー変換機構の解明に、大  
学院生で足を踏み入れ、四捨五入すると40年が過  
ぎてしまった。しかし、未だにその完全なる解  
明には至っておらず、まだ、遠い道のりである。  
ただ、一歩一歩進めている、名古屋大学での最  
近の知見を、少し紹介したい。

大腸菌などのべん毛モーターは、水素イオン  
(H<sup>+</sup>)の流により回転する。一方、私達の研究  
している海洋性ビブリオ菌（病原性はないがコレ  
ラ菌の仲間）の極に生えてるべん毛モーターは、  
ナトリウムイオン (Na<sup>+</sup>) 流により回転する。こ

このナトリウム駆動型モーターの回転に、大  
腸菌とは異なる部品が必要であることが分  
かった。これは、HリングとTリングと  
呼ばれる構造である。このリングの名前  
のHとTは、リングを発見した私の研究  
室の学生のイニシャルをとったものであ  
る。このビブリオ菌に特異的なリング構  
造形成の模式図を図2に示す。Tリングは、  
MotXとMotYと呼ばれるタンパク質が集  
合して作られたものである。このタンパク  
質に欠損が起こると、べん毛の構築は正常  
なのだが、回転運動が出来ない表現型を示  
す。Hリングは、*flgT*という遺伝子に変  
異が入ると、構造が欠損するということか  
ら発見された。HリングがなくなるとT

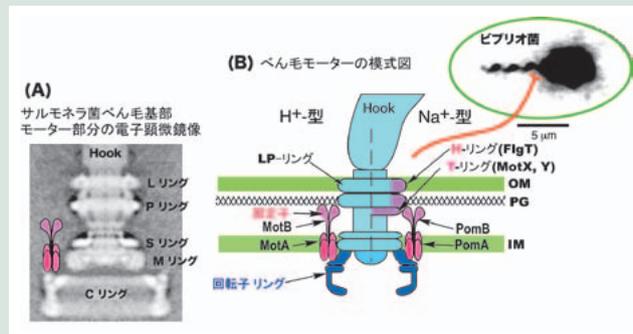


図1：べん毛モーター構造のモデル図と電子顕微鏡像  
(A) プロトン駆動モーターのサルモネラ菌べん毛基部部分の電子顕微鏡像。モーターの固定子は見えていないが、想像で書き入れている。  
(B) 左半分がプロトン駆動型、右半分がナトリウムイオン駆動型のモーターの模式図を示す。ナトリウムイオン駆動型のモーターにはプロトン駆動型では見られないTリングやHリング構造が存在する。

リングも構築できなくなってしまう。

細菌の進化の過程で最も初期に分岐した細菌群に属する *Aquifex aeolicus* は、至適生育温度が摂氏85度である超好熱性細菌である。この細菌は培養が困難であることから、ゲノム配列の結果からべん毛遺伝子は存在することは分かっていたが、実際に運動するか分かっていなかった。本菌を摂氏85度で特殊培養し、菌体の動きと電子顕微鏡による形態観察を行うことで、本菌は細胞の極に1本のべん毛を持って運動することを明らかにした。この原始細菌型のモーターの回転メカニズムを明らかにするため、私の学生が、*A. aeolicus* のDNAをドイツからもらって、モータータンパク質部分に大腸菌のモータータンパク質領域を融合させたキメラ型モーター固定子を作った。これを大腸菌内で発現させたところ、大腸菌の回転子をナトリウムイオン依存的に動かすことに成功した(図3)。これは、超好熱性細菌のパーツが、大腸菌の中でも機能したという驚くべきことであり、超好熱性細菌のべん毛がナトリウムイオン駆動であることを明らかにしたことになる。様々な細菌のべん毛モーター固定子の遺伝子配列を

比較した系統学的解析から、細菌の祖先はナトリウムイオンを使ってモーターのエネルギー変換を行っていたこと、そのエネルギー変換機構は細菌の祖先から現在まで統一されていること、進化の過程においてナトリウムイオン駆動型の固定子が

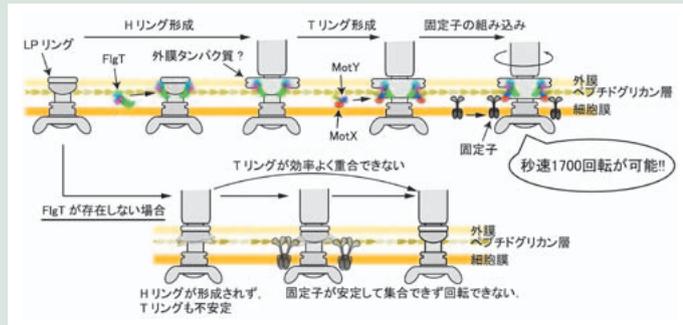


図2：ピブリオ菌べん毛モーターの形成モデル

FigTがモーター回転子の軸受けであるLPリングの周囲に集合し、他のタンパク質とともにHリングを形成する。次にMotXとMotYが周囲に集合し、Tリングを形成する。固定子は、Tリングを介して回転子の周りに組み込まれ、安定化される。HリングやTリングが形成できないと、固定子がモーター内に安定して集合できないため、べん毛モーターを動かすことができない。

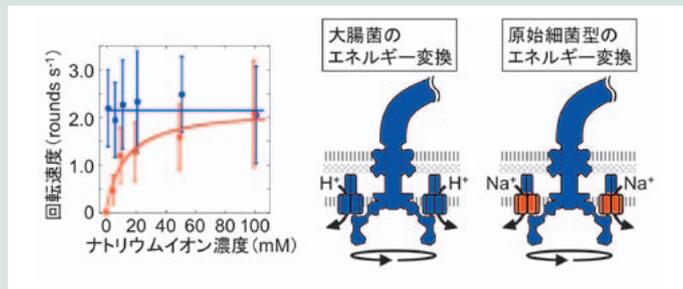


図3：超好熱性細菌べん毛モーターの回転エネルギー変換

超好熱性細菌のエネルギー変換キメラモーター部品を使って、大腸菌モーターをナトリウムイオン依存的に動かすことに成功した(右模式図)。大腸菌がナトリウムイオンとは関係なくモーターを水素イオンで回転させるのに対して(左グラフ青)、超好熱性細菌のキメラエネルギー変換ユニット(固定子)は、ナトリウムイオン濃度に依存してモーターを回転させる(左グラフ赤)。

一部の細菌へと水平伝播されたことなどを示唆する結果が得られた。本当かな？と疑う人もいるかも知れないが、妄想することはサイエンスの基本であると思う。

79年国際基督教大学教養学部卒業後、東京大学理学研究科植物学教室で細菌のべん毛研究で学位を取得し、米国エール大学 MB&B に留学した。88年に日本に戻り名古屋大学医学部付属病態制御研究施設講師となって、病原性酵母の研究を行った。その後、縁あって理学部に助教教授として移り、べん毛研究を再開した。実験大好き人間とみられていたようである。確かに、遊ぶより実験をしている方が楽しく感じていた。最近は実験ができないので、週末に料理をすることで、その代わりにしている。

ほんま みちお



## 平成27年度名古屋大学総長顕彰

## 6名3団体を表彰



平成27年度名古屋大学総長顕彰授与式が、3月25日(金)、午後4時15分より、豊田講堂第1会議室において行われ、6名の学生と3団体が表彰されました。

総長顕彰制度は、学問の研鑽や文化・社会活動等を通じて、「名古屋大学学術憲章」の目指す人物像を実践している学生を称えるために平成15年度に創設されたものです。顕彰の対象は、「学修への取り組み」(学修において成果が伴う取り組みを積極的に行っており、その姿勢・成果が他者の模範となると認められる者)及び「正課外活動への取り組み」(社会貢献活動、ボランティア活動、課外活動等において優れた評価を受けた者、又は本学の名誉を著しく高めた者)の2部門からなります。

今年度は、「学修への取り組み」部門に5件の学部推薦があり、また、「正課外活動への取り組み」部門には自薦・他薦を合わせて10件の応募がありました。

これら合計15件の推薦・応募について、理事及び部局長等で構成する総長顕彰委員会における審

査の結果、「学修への取り組み」部門で5名、「正課外活動への取り組み」部門で1名・3団体が受賞しました。

授与式終了後に行われた総長と受賞学生との懇談会においては、終始なごやかな雰囲気の中、総長から学生へ将来に向けての激励があり、また、関係教職員と受賞学生による活発な意見交換が行われました。

#### 全体の講評

今年度で13回目を迎える総長顕彰制度への推薦・応募のあった学生達の取り組みは、意欲や姿勢、各活動への情熱や熱意が感じられ、とても素晴らしいものばかりでした。惜しくも受賞を逃した学生も甲乙付けがたい内容であり、今後の活躍が楽しみです。

受賞した学生・団体においては、名古屋大学の目指す「勇気ある知識人」としての更なる研鑽を積み、今後の学生生活、社会生活において、後に続く本学の学生の目標となりうる人材として、さらなる成長を期待します。

## 「学修への取り組み」部門

氏名	学部学科・学年	受賞理由
くわはら かぜお 栞原 風音	教育学部人間発達科学科 4年	いずれの授業科目に対しても真面目で意欲的な態度で臨み、優秀な成績を収め、卒業論文はすべて英語で執筆するなど、世界基準で見ても十分に通用する行動力、語学力、研究力を兼ね備えている。英語力の維持・向上のため、国内のスポーツ専門誌の英語コラムの執筆や翻訳を行うなど、その成果を社会に還元もしている。大学院進学後もさらに研究を進展させ積極的な活躍することを期待する。
とよしま さや 豊島 紗耶	経済学部経営学科4年	成績優秀により、「グローバル人材育成プログラム海外視察研修旅行」のメンバーに選出され、タイやシンガポールの大学等を訪問し、英語による発表と現地学生との討論で優秀な成績を挙げるなど、授業やゼミナールでの海外研修等の機会を通じ、各国の学生等との交流を深め、国際性の涵養への努力と、真摯に勉学に取り組む姿は卓越しており、本学の学生の模範となるものである。卒業後は社会人としてさらに活躍することを期待する。
とみなが りょうすけ 富永 遼佑	理学部物理学科4年	成績が優秀であることに加え、他機関主催のスプリングスクールなど体験研修に参加し、原始銀河団の候補天体の発見により、最優秀プロジェクト賞を受賞するなど、高い評価を得ており、宇宙物理学の研究における成果は、国際会議で発表して意義あるレベルに達し、主著欧文論文に投稿することをめざしている。大学院進学後もさらに研究を進展させ将来は国際的に活躍する科学者になることを期待する。
ごとう けいけい 後藤 啓介	工学部機械・航空工学科 4年	本学初となるケンブリッジ大学の短期交換留学生に選ばれ、自身の専門分野以外の講義にも参加するなど、学業成績が優秀であることに加え、本学の進めるグローバル化教育にも積極的に取り組み、高い学修意欲と自発的で、かつ、独自のチャレンジ精神を持ち、自身の知識を他の学生と積極的に共有し高めあう姿勢は、他の学生の模範となるものである。大学院進学後もさらに研究を進展させ高度な専門知識を擁する研究者・技術者となることを期待する。
やまもと ひろと 山本 啓仁	農学部資源生物科学科 4年	高校生の頃から魚類に関する研究に興味を持ち、その当時訪問した研究室に現在所属するなど、積極的かつ意欲的に勉学に取り組んできた。また、交換留学プログラムに参加し、英語力やコミュニケーション能力の向上に努め、極めて高いレベルに達している。その能力を活かし、海外からの交換留学生のサポートなどにも関わり、周囲に好影響を与えるなど、他の学生の模範となっている。大学院進学後もさらに研究を進展させ国際社会で活躍することを期待する。

## 「正課外活動への取り組み」部門

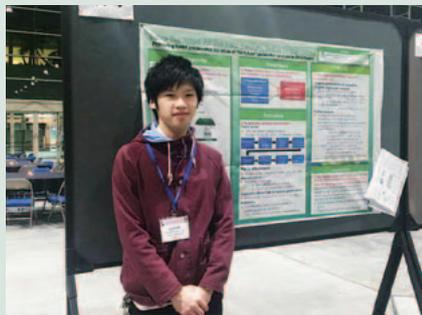
氏名・団体名	代表者	分野	受賞理由
いしやま あきのぶ 石山 顕信 (医学部医学科6年)		本学への貢献活動 国際交流	留学奨学金プログラム「トビタテ！留学 JAPAN」により Tulane 大学、Massachusetts General Hospital に留学し、自身が留学で学んだ経験を医学部の後輩に伝えるだけでなく、他学部の学生や本学を志望する高校生にも伝えるなど留学促進活動に努めてきた。特に、医学部に国際交流サークルを設立することに尽力し、その結果、留学生との交流が盛んになるなど、本学の国際交流に大いに貢献した。今後は医師として日本の医療の充実に尽力されることを期待する。
就活サポーター	さわい ゆうき 澤井 佑樹 (情報科学研究科 計算機数理学専攻 博士課程前期課程 2年)	本学への貢献活動 社会への貢献活動	平成14年度に就活サポーターが設立された当時から、就職が決まった学部4年生や博士課程前期課程2年生が、自らの経験を活かして、後輩の就職活動をサポートするなど、活発な活動を行ってきた。近年は、ホームカミングデイの際に、卒業生との交流の場を設けるイベントの開催や他大学の就職支援活動団体との活発な相互交流を実現するなど、本学の学生の進路支援に対する貢献のみならず、社会貢献の点でも高く評価できる。
名古屋大学 ねこサークル 「なごねこ」	おおにし たかと 大西 貴都 (理学部 地球惑星科学科 2年)	正課外活動(その他) 本学への貢献活動	東山キャンパス内の野良猫問題を解決するため、平成24年3月から活動を開始し、その後、本学内に生息する野良猫を「地域猫」として捉え、猫の不妊手術の徹底、環境美化に配慮したえさやりなど、適切な猫の管理・世話を行う活動を進めてきた。このことは、新聞にも取り上げられるなど、本学の環境衛生の向上、猫の殺処分の減少など、人間と動物が共生を図る面からも大いに社会に貢献しており、今後の活動にも期待が持てる。
KagaQ (かがく)	えびはら てつお 海老原 哲男 (理学研究科 生命理学専攻 博士課程前期課程 1年)	正課外活動(その他) 社会への貢献活動	KagaQ は、本学の学生が中心となり、「楽しむ」、「学ぶ」、「やってみる」を活動理念に掲げ、小学生から一般社会人までの幅広い世代を対象に「サイエンスをもっと身近に」をコンセプトにした科学コミュニケーション活動を通して、サイエンスの魅力を多くの方に伝えてきたことは、社会への貢献として評価できる。未だ発掘されていない科学と交わる分野を結びつける新しい企画に挑戦するなど、今後の活動にも期待が持てる。

# 平成27年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば

「学修への取り組み」部門

探求し、発信する研究者へ

栞原 風音 教育学部人間発達科学科4年



国際学会 (SPSP 2016) での発表の様子

私は本学教育学部において、人間の行動を科学的な観点から解明する「心理学」、とくに社会心理学という学問に出会いました。環境問題が叫ばれるようになって久しい今日ですが、ともすると我々はそれを緩和する科学技術にばかり関心がいてしまいがちです。しかしながら、どんなに科学技術が進歩しようとも、地球環境に関する意思決定やメンテナンスを行う主体が人間であるということは、今後もおそらく変わることはないでしょう。こうした問題意識から、私は、「人間」に着目し、自分達の世代を超えて、遠い将来の人々に持続可能な環境を残すための行動の心理的促進因子について、卒業論文で検討しました。また、この研究の成果を去る1月にアメリカ・サンディエゴで行われた国際学会において、英語で報告する機会にも恵まれました。この経験を糧に、人間の行動とこころの本質を探り、その研究成果を世界へと発信することができる研究者となることを志します。

くわはら かざね 1994年生まれ 愛知県出身

「学修への取り組み」部門

海外で学んだ経験

豊島 紗耶 経済学部経営学科4年



チュラロンコン大学において「日本とタイにおける観光の促進」について、プレゼンテーションする様子

私は、4年間の学生生活において、特に海外に視野を広げて学ぶことに力を注ぎました。1年次のスウェーデン・フィンランドでの学校訪問、3年次のタイ・シンガポール海外視察研修旅行での企業・学校訪問、4年次の中国広州市で開催された「インダストリアル・マネジメント・経営・国際コンファレンス」への参加など、海外で学ぶ多くの機会をいただきました。海外に視野を広げることで、「常に感謝の気持ちをもって生活することの大切さ」、「語学・コミュニケーション力の必要性」、「海外の学生の高い意識・積極性」を身に染みて感じ、この海外での経験が、もっと勉学に励みたいという強い思いに繋がりました。

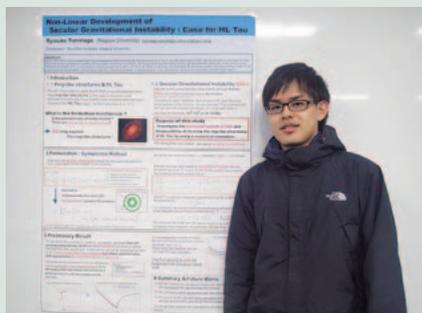
今後は、日本と世界の玄関口である羽田空港において、グランドスタッフとして仕事をします。海外との繋がりが深い仕事の中で、4年間の名古屋大学での学びを生かし、日本・世界の多くのお客様に最高のサービスを提供していけるように、精一杯頑張っていきたいと思います。

とよしま さや 1993年 長崎県出身

「学修への取り組み」部門

宇宙物理学者を志して

富永 遼佑 理学部物理学科4年



国際研究会で発表したポスター

私は中学生の頃から宇宙に興味があり、大学で宇宙物理学を学びたいと考えていました。大学入学後、学部での学習を通して未解明である惑星形成理論の研究をしたいと思うようになりました。現在、理論宇宙物理学研究室に所属し、その研究を行っています。

惑星形成理論には多くの問題があります。私は、「惑星ができる環境はどのように変化するのか」という問題に興味を持ちました。卒業研究では、この問題に取り組むための数値計算手法を開発しました。その研究結果をもとに昨年の夏に国際研究会に参加し、ポスター発表を行いました。またそこで惑星形成理論の最先端の研究発表を見ることができました。これらは、学部生の私にとって大変貴重な体験となりました。

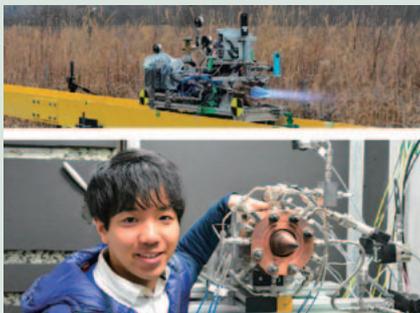
近年の観測技術の発達によって惑星形成の現場が直接観測されつつあります。しかし、惑星形成の理論には多くの課題が残っています。今後博士課程まで進学し、それらに取り組むたいと考えています。惑星形成理論の解明に貢献できるような研究者になりたいです。

とみなが りょうすけ 1993年生まれ 神奈川県出身

## 「学修への取り組み」部門

### 今までの挑戦、これからの挑戦

後藤 啓介 工学部機械・航空工学科4年



回転 detonation エンジン滑走試験／実験室にて筆者

私は、社会に役立つものづくりに携わるエンジニアになることを目指し、4年間の学生生活を過ごしてきました。大学では航空宇宙工学を専攻し、卒業研究では、回転 detonation エンジンという新たな宇宙用推進機の実用化に向け、特にインジェクタに関する研究を行ってきました。研究中には JAXA との共同プロジェクト等貴重な学びの機会にも恵まれ、世界初の地上滑走試験に参加し、その成功に貢献できたことが大きな成果でした。今後も修士課程を通じて、このエンジンが遠くない将来実用化され、宇宙へ飛び立てるよう研究を継続していきたいと思えます。

また、3年生時の英国ケンブリッジ大学への半月にわたる交換留学を通して、世界トップレベルの教育を肌で感じ、改めて、海外留学への想いを強くしました。

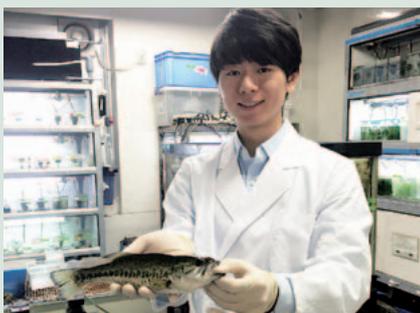
8月からは航空宇宙工学の本場、米国ミシガン大学への長期交換留学に臨み、更に見識を深め、国際的にも活躍できる技術者を目指して挑戦し続けたいと思えます。

ごとう けいすけ 1994年生まれ 愛知県出身

## 「学修への取り組み」部門

### 幼少期に抱いた謎の解明へ

山本 啓仁 農学部資源生物科学科4年



研究室にてブラックバスとともに

私は幼少期に抱いた疑問である「なぜブラックバスはルアーやワームなどの疑似餌を食べるのか」を解明するため、本学の水圏動物学研究室で日々研究をしています。3度の短期留学を経て、大学4年次には、ブラックバスを研究しておられる教授の方々が多く在籍するアメリカのノースカロライナ州立大学に交換留学させていただきました。現地で教授の方々との会話や議論を通し得られたものは、現在の研究の礎となっているだけでなく、魚類を研究していく上で、必要になるとされるネットワークを海外で形成でき、自らの研究をより円滑に行う手助けになると考えております。

現在は、ブラックバスの視覚特性を研究しておりますが、今後は視覚のみならず、多方面からアプローチをして、その謎の解明に努めていきたいと思えます。

将来は、より多くの人に釣りの楽しさを感じていただけるような取り組みを考えていきたいと思えます。

やまもと ひろと 1992年生まれ 愛知県出身

## 「正課外活動への取り組み」部門／本学への貢献活動・国際交流

### 名古屋から世界へ

石山 顕信 医学部医学科6年



「トビタテ！留学 JAPAN」東海地区留学促進イベントにて

高校時代から海外に関心があった私は、国際交流が盛んな大学に進学しようと名古屋大学に入学しました。東山キャンパスでは、当時から本学の学生と留学生の交流する場が多くありましたが、鶴舞キャンパスにはほとんどありませんでした。名古屋大学は、医学部でも留学生が多く学びに来ている事を知り、医学部の学生にも国際交流の場を提供したいと考え、国際交流サークル MDEC を創立しました。

6年次には、私自身が派遣留学「トビタテ！留学 JAPAN」のプログラムにおいて、Tulane University や Massachusetts General Hospital へ留学した経験を活かし、名古屋大学の後輩、さらに東海地方の他大学の学生に向けても留学促進イベントを開催しました。

大学では、国際交流活動や留学促進活動に邁進して参りましたが、今後はより一層医学にも真剣に取り組むと考えております。名古屋大学で培った海外志向の考え方を忘れず、常に海外にも視野を向け精進致します。

いしやま あきのぶ 1989年生まれ 愛知県出身

「正課外活動への取り組み」部門／本学への貢献活動・社会への貢献活動

## 就活サポーターの取り組み

就活サポーター

澤井 佑樹

情報科学研究科計算機数理学専攻  
博士課程前期課程2年



就活サポーターによる就活生支援業務の様子

就活サポーターは進路が決定している学生（サポーター）が自らの就職活動経験を活かし、これから就職活動を行う学生（プレーヤー）を支援する団体です。主な活動には就活生に対する相談業務、就活支援イベントの実施、卒業生との交流があります。特に相談業務に関して、サポーター自らの就職活動体験を語ることを中心にプレーヤーの疑問に直接答え支援することで、不安の軽減・解消に大いに貢献しています。また卒業生との交流は、サポーター自身のキャリア形成や目指す社会人像を考える機会として役立っています。

更に、今年度は新たな取り組みとして、中部地区の中小企業の採用活動を活性化するための意見交換会を中部産業連盟と共同で開催致しました。

私たちの活動は就職支援室や卒業生など多くの方の支援のもとに成り立っています。その感謝を忘れず、社会人として活躍する中で、今後の就活サポーターの更なる発展のために私たち自身も貢献し続けたいと思います。

さわい ゆうき 1991年 滋賀県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外活動（その他）・本学への貢献活動

## 人と猫の共存を目指して～大学における地域猫活動

名古屋大学ねこサークル「なごねこ」

大西 貴都

理学部地球惑星科学科2年



周辺美化に配慮した日々の餌やり風景。耳カットは不妊手術済みを示します。写真の猫は、実（雄猫、推定6歳）。

「なごねこ」は、東山キャンパス内に生息する猫を対象に、地域猫活動を行うサークルです。地域猫活動とは、外猫の数を今以上に増やさずに、現存する猫は地域猫として一代限りの生を全うさせ、人と猫が共存できる環境を作る試みです。具体的な取り組みとして、猫の個体数把握のための「ねこ籍」の作成、避妊去勢手術の徹底、周辺美化に配慮した餌やりの徹底、里親探し、病気や怪我の猫の治療です。これらの活動の最大の成果は、2012年3月の活動開始時に50匹近くいた猫の数が現在は20匹にまで減少したことです。この大学生が主体となって地域猫活動を行うという姿勢が評価され、新聞取材や、地域の方々からのご支援を頂けるようになり、名大生による社会・地域貢献活動の一つとして本学に貢献できたと思います。今後の課題は、大学に活動を公認化して頂き、餌や捕獲器具の保管場所を学内で確保し、冬の時期に猫たちの防寒箱の設置を目指します。

おおにし たかと 1994年生まれ 三重県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外活動（その他）・社会への貢献活動

## 名古屋から発信する「生きるカガク」!

KagaQ (かがく)

海老原 哲男

理学研究科生命理学専攻  
博士課程前期課程1年



KagaQでは一般の方（高校生以上）を対象としたサイエンスカフェと小学生以上を対象とした実験教室を開催しています。上は実験教室、下はサイエンスカフェの様子。

KagaQ (カガク) は、設立してまだ間もない市民サークルです。これまで、小学生以上を対象とした実験教室の企画や専門の先生を招待してのトークライブを行うサイエンスカフェを運営してきました。メンバーは、名大生だけでなく、他大学の学生や一般市民の方々も参加しています。

科学分野の知識や身に着けた技能は、研究室生活や日常生活で生きていくものもあれば、あまりなじみのないままで終わってしまうものもあります。その中で「どうしてだろう」と抱く疑問は、意外と他の人も同じことを考えているかもしれません。科学に対して抱く気持ちを共有し、自分自身も科学の面白さを体感したい、そんな思いから活動しています。次世代で活躍するサイエンスコミュニケーターの育成も目指しながら、今後も、名古屋を拠点に科学が持つ無限の可能性を沢山の方々と一緒に考えていきます。その中で地域の理科教育活動の一環として、理科離れの解消に繋がればと思っています。

えびはら てつお 1992年生まれ 石川県出身

# 創薬科学研究館竣工記念行事を開催

●大学院創薬科学研究科



記念講演会終了後の記念撮影

大学院創薬科学研究科は3月3日(木)、野依記念学術交流館ならびに理学南館坂田・平田ホールにおいて、創薬科学研究館竣工記念行事(記念式典・記念講演会)を開催しました。この記念行事は、昨年8月に東山キャンパス北東エリアに完成した、創薬科学研究館(6階建て、総床面積6,720m<sup>2</sup>)の竣工を記念して開催されたものです。平成24年4月に設置された同研究科は、これまで、キャンパス内において、理学部B館、農学部A館、工学部6号館などに分散していましたが、新棟竣工に伴い集約され、今後更なる発展が期待されます。

式典では、松尾総長のあいさつに続いて、平井明成文部科学省大臣官房文教施設企画部計画課長より来賓祝辞が述べられました。その後、奥宮施設・環境計画推進室長より、アースチューブやエコシャフト、日射遮蔽に効果的な彫の深い窓を配した、創薬科学研究館の建物説明がありました。

式典後に開催された記念講演会では、まず、長田重一大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授による記念講演「細胞死と細胞膜の非対称性」が行われ、プログラム細



平井文部科学省大臣官房文教施設企画部計画課長による来賓祝辞

胞死に引き続いて起こる免疫細胞マクロファージによる細胞の除去が、細胞膜の成分による“eat me (わたしを食べて) シグナル”によるものである、という最新の研究成果が紹介されました。次いで、2015年ノーベル医学生理学賞受賞者である大村 智北里大学特別荣誉教授による記念講演「特異な生物活性を有する微生物代謝産物の発見と創薬」が行われ、画期的な感染症治療薬であるアベルメクチンの発見ならびに産学連携を経た医療への展開が紹介されました。記念講演会には、約300名が参加しました。

その後、創薬科学研究館へと会場を移し、内覧会と祝賀会が行なわれました。来賓の太田 茂日本薬学会会頭からは祝辞が述べられ、木村理事、國枝理事のあいさつに続いて懇談が行なわれ、最後に同研究科前研究科長である松下理事のあいさつにより、大盛会のうちに記念行事を終了しました。



長田大阪大学教授による記念講演の様子



大村北里大学特別荣誉教授による記念講演の様子

## アジア法交流館落成記念式典等を開催

●大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター

大学院法学研究科及び法政国際教育協力研究センター(CALE)は、3月11日(金)、「アジア法交流館」落成記念式典、翌12日(土)に国際シンポジウムを開催しました。アジア法交流館(5階建て、延べ面積5,497m<sup>2</sup>)は、同研究科及びCALEにおけるこれまでのアジア法整備支援事業の実績が評価され、文部科学省の助成により、昨年11月、法学研究科棟の正面に、CALEが拠点を置く建物として竣工しました。

「アジア法交流館」は、アジアの法律家、学生、市民の法の交流空間としての広場「アジア法のAGORA(ギリシア時代のポリス市民の市場)」をめざし、アジア法情報を備えたアジア法資料室、世界レベルの研究者が集結し国際シンポジウム・セミナーを開催するアジアコミュニティフォーラム、レクチャールーム、セミナールーム、研究室等を備えています。また、随所にアジアや世界を常に身近に感じられる空間、学生がアジアを学びたいと自発的に思える空間を整備しました。さらに、株式会社東海メディカルプロダクツの筒井宣政会長、陽子副会長より、広間・小間・水屋からなる本格的な茶室「白蓮庵」を寄贈いた



茶会の様子



落成記念式典テープカット

き、また、矢橋ホールディングス株式会社より、日本の四季を感じることのできるコミュニケーションガーデン、木製テーブルセットを寄贈いただきました。

落成記念式典には、松尾総長、前川喜平文部科学審議官をはじめとして、外務省、法務省、JICA、JETRO等より約200名が出席しました。式典に引き続き、ASEAN本部よりAKPモクタン事務次長を講師として、「ASEAN 2025」に関する講演が行われました。講演後には、同館正面玄関前でテープカットも行われました。その後の内覧会においては、「白蓮庵」にて茶会を開催しましたが、抹茶茶碗をはじめとする茶道具を常滑商工会議所・とこなめ焼協同組合の協力により常滑焼作家の方々から寄贈いただき、株式会社南山園にも茶会開催に協力いただきました。その後、植樹式を開催し、40名を超える海外からの来訪者が植樹式に参加しました。レセプションパーティーには、大村秀章愛知県知事も出席し、澤田酒造株式会社の協力により鏡開きも行い、盛大な式典となりました。また、式典当日は、松村公嗣愛知県立芸術大学長、柴崎幸次同大学美術学部教授の芸術作品で新棟を装飾し、式典に花が添えられました。

式典翌日は、「アジア-日本『法協力』の新時代-教育と研究の交錯と発展-」と題する国際シンポジウムを開催し、「日本法教育研究センターにおける法学と日本語教育学の多元複層的なアーティキュレーション」、「アジア市場経済移行諸国における行政法の法典化と行政法整備支援」、「ASEAN経済共同体の構築と法整備支援の課題」の3セッションが行われ、「アジア法交流館」での初めての国際シンポジウムを開催しました。

今後、日本とアジア、さらに広く世界から訪れる留学生・研究者の憩いの語らいの場として、AGORAのコンセプトにふさわしい人々が集う「アジア法交流館」をめざします。

## ハイデルベルク大学と合同国際シンポジウムを開催

●大学院文学研究科

大学院文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センターは、2月29日(月)から3月2日(水)の3日間、ドイツのハイデルベルク大学カール・ヤスパース・トランスカルチャー高等研究センターにおいて、国際シンポジウム「中世の日本とヨーロッパにおける聖なるもののイミジャーとマテリアリティー：仏教・神道・キリスト教」を開催



基調講演を行う阿部教授

しました。同シンポジウムはハイデルベルク大学のクラスター・オブ・エクセレンス「グローバル・コンテキストにおけるアジアとヨーロッパ」との合同により開催され、約60名が参加しました。シンポジウムでは、あらゆる宗教において志向される現実を超えた「聖なるもの」が、つねに物質性に根ざして発現するというパラドクシカルな事態に注目し、文字に限らずイメージ、身体、聖遺物、音声、建築や都市の空間、自然または人工の景観といった様々な要素によって織りなされるテキストを拠りどころとして、人文学の地平を拡張しようとする同研究科の挑戦的な試みのひとつです。仏教、神道、キリスト教における多様な宗教的实践を詳細に比較することにより、総合的な展望の獲得と考察の深化を目指しました。阿部泰郎同センター長による基調講演「中世日本における『聖なるもの』のマテリアリティー：善光寺如来をめぐる造像・伝承・宗教空間」にはじまり、本学とハイデルベルク大学を中心に、ストラスブール大学、パリ、デイドロ大学、ハンブルク大学、昭和女子大学、筑波大学、東京大学などから参加した研究者や大学院生による研究発表と討議を行いました。今後も両大学が連携してこのような研究交流を実施していきます。

## 公開シンポジウム「教師教育における研究総合大学の役割」を開催

●大学院教育発達科学研究科

大学院教育発達科学研究科は、3月13日(日)、IB電子情報館大講義室において、公開シンポジウム「教師教育における研究総合大学の役割」を開催しました。本シンポジウムは、同研究科内に「教師教育学領域」が設置されたことをきっかけに実施されたものです。

当日は、ケンブリッジ大学教育学部のエレーン・



シンポジウム終了後の記念撮影

ウィルソン氏を招き、「教師教育の政策と実践における学術研究の意義－ケンブリッジ大学の事例から－」と題して基調講演が行われました。講演では、厚みのある研究力を資源にした大学の専門知を教師教育に活かすこと、また卒業生を介した教育現場とのネットワーク形成によってプログラムに実践知を位置づけることの重要性が述べられました。

午後には、「先導的な教育実践の取組とそれを支える教師の専門性」として、愛知県立旭丘高校、愛知県立岡崎高校、本学教育学部附属中・高等学校から、SGH、SSHなど、それぞれの学校の取り組みの成果である先進的な実践が、また愛知県総合教育センターからは、ルーブリックなどを用いた「多様な学習評価方法」及び「ミドルリーダーの育成」に関わる研究の成果報告がありました。その後、これら3校の校長、同センター所長に、本学の高大接続研究センター長を加えた5名によるパネル討論が行われました。

当日は、愛知県内外の高等学校、教育委員会、大学関係者、一般市民など100名以上の参加がありました。発表や報告の後には、本学のような研究総合大学において教員養成を行うことの役割や意義について、多くの活発な質疑・意見交換が行われました。

## モンゴル国立大学・名古屋大学レジリエンス共同研究センター開所式を挙

●減災連携研究センター、大学院環境学研究科

減災連携研究センター及び大学院環境学研究科は、2月20日(土)、モンゴル国立大学においてモンゴル国立大学・名古屋大学レジリエンス共同研究センターの開所式を挙りました。同センターの設立は2年前の両大学間の協力合意が端緒となり、その後、減災連携研究センター、環境学研究科を中心にモンゴル国立大学と議論を重ね今回の覚書



記念撮影

締結にいたりました。

レジリエンスとは、災害や事件からしなやかに立ち直る力を意味し、サステナビリティと並ぶ重要な概念として国連等もその実現を今後の課題としています。モンゴルや日本など多くの国は、未解決の自然災害問題、地球環境及び都市問題に直面し、レジリエンスの観点から今後の社会構造・国土構造のあり方を検討する必要に迫られています。また文化や伝統を尊重して、民族固有の生きる力を見直すことも重要となります。

同センターは国際共同研究の成果に基づいて、こうしたレジリエンスを高めるための総合的方策のあり方を学際的あるいは超学際的に議論し、その実現を支える人材育成につなげることを目指し、関係省庁や国際機関からも多くの期待を集めています。

開所式には、本学から市橋理事、磯田アジアサテライトキャンパス学院長、神沢環境学研究科長をはじめ約25名、モンゴル側からはモンゴル国立大学のバートルガ・スヘー学部長、バドラル・トゥブシン危機管理庁長官ら約30名が参加しました。厳粛なセレモニーが進行される中で、早速、レジリエンスの概念と改善策に関する本質的な議論も始まりました。

## 大学教育改革フォーラム in 東海 2016を開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センターでは、3月12日(土)、愛知大学名古屋キャンパスにおいて、「大学教育改革フォーラム in 東海 2016」を開催しました。今回は、同センターによる企画運営における支援のもと、東海地区の中小規模私立大学の教職員による実行委員会が開催する形式となり、やや規模を縮小しての開催となったものの、東海地区を中心に



分科会での議論の様子

300名の参加がありました。当日は、大学入試センターの大塚雄作氏による基調講演「高校と大学の双方が信頼できる高大接続のあり方」のほか、10の分科会とポスターセッションがあり、活発な議論が交わされました。

基調講演では、社会の耳目を集める入試改革の動向を中心に議論が進められ、検討中の新たな共通試験が抱える実行可能性や費用面での課題が指摘されました。その上で、現行入試の長所をふまえながら、よりよい形態を模索することの重要性について議論が交わされました。

分科会は、「今、大学の中で職員は何をなすべきか」、「大学を中心とした有機的地域連携」、「物理学講義実験から体験学習への発展の可能性を探る」、「ラーニングコモンズを活用した学習」、「大学図書館と地域連携」、「高大接続」「IRと経営改善」、「グローバル人材育成」、「学生が学ぶ授業運営の工夫」及び「学生の学びと大学図書館における展示活動」の10テーマに沿って進められました。同センターでは今後もボランティア教職員による実行委員会を支援し、東海地域の大学教育の質向上へ貢献していきます。

## 第63回 NUMCo を開催

●博物館



コンサートの様子

博物館では、2月27日(土)、第63回 NUMCo を開催しました。今回は、小林美保氏、竹中幹子氏によるウクレレデュオ「Yeh ☆`ie」による演奏が行われました。演奏は「フラガール (映画フラガールより)」から始まり、「銀河鉄道999」、オリジナル曲の「ソラノロード」や「Tokada」などアンコールも含め、全10曲が披露され、本格的なウクレレの演奏を聴くのは初めてという方も演奏に聞き入り、特に「Tokada」では、クラシックギターと聞き違えるような演奏テクニックで聴衆は魅了されました。また、「ワイキキ」、「花は咲く」の2曲は、千田初子氏によるフラダンスも披露されました。さらに今回は、吹き抜けを使った3階からの登場など後列の方でも楽しめる演出も見られました。また、一昨年から始めた演奏終了後に、各自で行うイスの片付けもリピーターを中心にスムーズに行われるようになりました。当初は心配していた怪我や混乱もなく、博物館コンサートに定着しつつあります。

## 第64回 NUMCo を開催

●博物館



コンサートの様子

博物館では、3月5日(土)、第64回 NUMCo 「博物館がjazzyになる」を開催しました。今回は長谷川智則氏(サクソ)、牧野伸太郎氏(ベース)、西彩子氏(ボーカル)、松永有希子氏(キーボード)、関野勇氏(ドラム)の5名によるジャズコンサートが行われました。軽音楽部エーデルレーテジャズオーケストラのOBである長谷川氏が、ライブハウス等で活躍するミュージシャンや軽音楽部OBに呼びかけて結成したバンドです。同館での演奏は3回目となり、今回は、「Smile」、「海に見える街」、「さくら」、「Take Five」など馴染みのある曲をはじめとする全11曲が披露されました。満席となった237名の聴衆も十分満喫し、「楽しかった」、「今度はいつあるのか」、「次回も期待するよ」などの声が寄せられました。2001年から始まったナムコの愛称を持つ博物館コンサートですが、昨年度は5回開催し、通算64回となりました。今年度も引き続き開催いたしますのでぜひご来館ください。

## 第118回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター



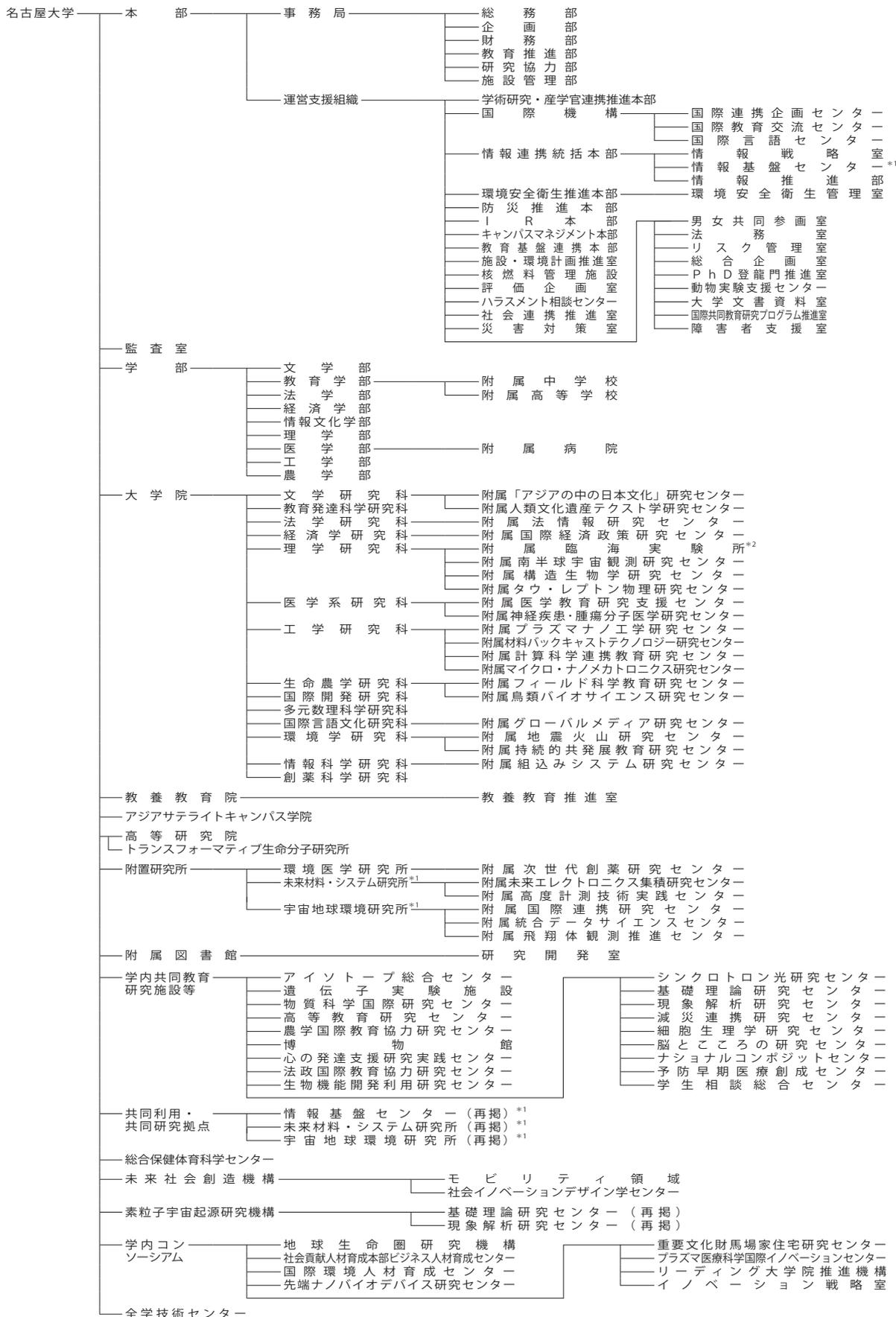
講演を行う畑村工学院大学教授

減災連携研究センターは2月25日(木)、減災館1階減災ホールにおいて、第118回防災アカデミーを開催しました。今回は、株式会社畑村創造工学研究所代表で、東京大学名誉教授である畑村洋太郎工学院大学教授による講演「津波と真の対策を考える」が行われ、111名の参加がありました。畑村教授は2002年にNPO法人失敗学会を設立されるなど、多方面で失敗知識活用の活動を展開されています。

畑村氏は講演で、津波対策の切り札としての各地での防潮堤計画・建設に触れ、「防潮堤」という名称は津波を完全に遮断するという考えからきており、低い防潮堤では役に立たないと考える人が多いが、防潮堤の真の役割は越流する津波を減じ、その威力を減殺して避難の時間を稼ぐことにあると解説がされました。そして、東日本大震災の現地調査結果を踏まえ失敗学の立場からこれからの減災策として、この「減潮堤」と「避難」を組み合わせた津波への対応策を提案されました。

# 平成28年度名古屋大学組織図

平成28年 4月 1日



## 受賞者一覧

### 教員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H27. 2.24	第11回（平成26年度）日本学術振興会賞	大学院生命農学研究科 准教授	佐藤 豊	
H27. 3.15	第1回ジャパン・レジリエンス・アワード 最優秀レジリエンス賞		減災連携研究 センター	
H27. 5.29	電気学会 電気学術振興賞 論文賞	大学院工学研究科教授	道木 慎二	
H27. 6. 6	第58回日本腎臓学会・優秀演題賞	大学院医学系研究科 特任講師	秋山 真一	
H27. 6.11	免震構造協会普及賞		減災連携研究 センター	
H27. 8. 7	第27回中部地盤工学シンポジウム 優秀講演者賞	大学院工学研究科助教	吉川 高広	
H27. 9. 1	日本保健物理学会 第48回研究発表会 優秀賞（一般の部）	大学院医学系研究科講師	川浦 稚代	
H27.10. 9	第50回地盤工学研究発表会 優秀論文発表者賞	大学院工学研究科助教	酒井 崇之	
H27.10.17	日本材料学会 第15回コンクリート構造物の 補修、補強、アップグレードシンポジウム 優秀論文賞	大学院工学研究科助教	三浦 泰人	
H27.11. 3	IEEE Communication Society 感謝状 （SmartGridComm における国際連携）	未来材料・システム研究所 教授	片山 正昭	
H27.11. 5	Asian Core Program/Advanced Research Network Lectureship Award	大学院生命農学研究科教授	西川 俊夫	
H27.11.11	土木学会平成27年度全国大会 第70回年次学 術講演会 優秀講演者	大学院環境学研究科助教	奥岡桂次郎	
H27.11.13	新道路技術会議 優秀技術研究開発賞	大学院環境学研究科教授	中村 英樹	他3名と連名
H27.11.17	平成27年度（第30回）日本衛生学会奨励賞	大学院医学系研究科講師	矢嶋伊知朗	
H27.11.30	第70回（平成27年度）日本セラミックス協会賞 進歩賞	未来材料・システム研究所 助教	林 幸彦朗	
H27.12. 1	土木学会 第18回応用力学シンポジウム 講演賞	大学院工学研究科准教授	廣畑 幹人	
H27.12. 8	第23回星野賞（日本脳腫瘍学会）	医学系研究科客員研究員	鈴木 啓道	
H27.12.10	ウッドデザイン賞 2015		未来社会創造 機構まちづくり ミニプロジェクト	代表：太幡英亮（大学院工学研究科准教授） と連名
H27.12.10	ウッドデザイン賞 2015	大学院環境学研究科准教授	古川 忠稔	工学部施設整備推進室、他1件と連名
H27.12.10	第13回日本中性子科学会 学会賞	大学院工学研究科特任教授	鬼柳 善明	
H27.12.16	第16回計測自動制御学会 システムインテグレーション部門講演会 SI2015優秀講演賞	大学院工学研究科教授	原 進	
H28. 1. 9	2015年度（第10回）応用物理学会 東海支部貢献賞	未来材料・システム研究所 教授	財満 鎮明	
H28. 1.12	日本機械学会 フェロー（JSME FELLOW）	大学院工学研究科教授	秦 誠一	
H28. 1.14	愛知県若手研究者イノベーション創出奨励事業 第10回わかしゃち奨励賞 応用研究部門 最優秀賞	未来社会創造機構特任講師	小野島大介	
H28. 1.14	愛知県若手研究者イノベーション創出奨励事業 第10回わかしゃち奨励賞 応用研究部門 優秀賞	大学院工学研究科准教授	森田 康之	
H28. 1.19	トムソン・ロイター社 Highly Cited Researchers	大学院理学研究科教授	野尻 伸一	
H28. 1.19	トムソン・ロイター社 Highly Cited Researchers	大学院生命農学研究科教授	榊原 均	
H28. 1.19	トムソン・ロイター社 Highly Cited Researchers	生物機能開発利用研究 センター教授	松岡 信	
H28. 1.19	トムソン・ロイター社 Highly Cited Researchers	生物機能開発利用研究 センター准教授	上口（田中） 美弥子	
H28. 1.22	第34回日本口腔腫瘍学会総会・学術大会 優秀ポスター賞	医学部附属病院医員	市村 典久	日比英晴（大学院医学系研究科教授）、 山本恵幸（医学部附属病院講師）、 西川雅也（医学部附属病院助教）、 他3名と連名

## 受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H28. 1.23	日本疫学会 功労賞	大学院医学系研究科教授	濱嶋 信之	
H28. 1.30	第27回(2015年度)日本木材学会賞	大学院生命農学研究科准教授	松下 泰幸	
H28. 1.30	第27回(2015年度)日本木材学会奨励賞	大学院生命農学研究科助教	松尾 美幸	
H28. 2. 4	井上科学振興財団 2015年度第32回井上學術賞	大学院理学研究科教授	犬塚修一郎	
H28. 2. 4	井上科学振興財団 2015年度第32回井上研究奨励賞	高等研究院特任助教	佐野 栄俊	
H28. 2.13	第12回統合失調症研究会研究助成優秀賞	高等研究院特任助教	久島 周	
H28. 2.13	日本流体力学会 フェロー	大学院工学研究科教授	新美 智秀	
H28. 2.18	有機合成化学協会 2015年度 有機合成化学協会賞	大学院工学研究科教授	石原 一彰	
H28. 2.18	有機合成化学協会 2015年度 有機合成化学協会研究企画賞	トランスフォーマティブ 生命分子研究所特任助教	南保 正和	
H28. 2.19	第45回日本神経放射線学会 最優秀口演賞	医学部附属病院病院准教授	田岡 俊昭	川井 恒(医学部附属病院助教)、 中根俊樹(医学部附属病院病院助教)、 長縄慎二(大学院医学系研究科教授)と 連名
H28. 2.19	第45回日本神経放射線学会 優秀症例展示賞	医学部附属病院助教	川井 恒	田岡俊昭(医学部附属病院病院准教授)、 中根俊樹(医学部附属病院病院助教)、 櫻井康雄(医学部附属病院副診療放射線技 師長)、他2名と連名
H28. 2.20	第45回日本神経放射線学会 フィルムリーディングセッション 銅賞	脳とこころの研究センター 教授	磯田 治夫	
H28. 2.21	第49回フラーレン・ナノチューブ・グラフェン 総合シンポジウム 若手奨励賞	大学院工学研究科助教	廣谷 潤	
H28. 2.22	Editor's Award for Best Paper, International Journal of Hyperthermia	医学部附属病院医員	生田 国大	西田佳弘(大学院医学系研究科准教授)、 石黒直樹(大学院医学系研究科教授)、 小林 猛(名誉教授)、他7名と連名
H28. 2.23	平成27年度手島精一記念研究賞(博士論文賞)	大学院理学研究科研究員	國友 正信	
H28. 2.24	第12回日本学士院学術奨励賞	大学院多元数理科学研究科 教授	林 正人	
H28. 2.24	第12回日本学術振興会賞	大学院多元数理科学研究科 教授	林 正人	
H28. 2.24	第12回日本学術振興会賞	大学院理学研究科教授	松林 嘉克	
H28. 2.24	平成27年度赤崎賞	大学院工学研究科助教	安井 隆雄	
H28. 2.29	平成27年度コニカミノルタ画像科学奨励賞	未来材料・システム研究所 准教授	松田 佑	
H28. 2.29	ASSC(サステイナブルキャンパス評価システム) による「プラチナ」認定		名古屋大学	
H28. 3. 2	第6回日本学術振興会 育志賞	大学院理学研究科 特別研究員(PD)	竹川 宜宏	
H28. 3. 2	第6回(平成27年度)日本学術振興会育志賞	トランスフォーマティブ 生命分子研究所 JSPS 特別研究員	武藤 慶	
H28. 3. 8	Award for Excellence, The ICMC Cryogenic Materials	大学院工学研究科准教授	飯田 和昌	
H28. 3.10	日本薬理学会第31回学術奨励賞	大学院創薬科学研究科講師	小坂田文隆	

## 学生

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H26. 1.22	電気学会 電気学会優秀論文発表賞	工学部4年	近藤 孔亮	
H26. 8.27	平成26年度電気学会産業応用部門大会 YPC 優秀発表賞	大学院工学研究科 M1	近藤 孔亮	
H26.11.28	糖鎖科学中部拠点研究奨励賞	大学院生命農学研究科 M2	新美 百希	羽根正弥(大学院生命農学研究科 D3)、 北島 健(生物機能開発利用センター教授)、 佐藤ちひろ(生物機能開発利用センター准教授) と連名

## 受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H27. 6. 5	第58回日本腎臓学会 Best Presentation Award	大学院医学系研究科 D3	杜 邱娜	
H27. 6. 6	第58回日本腎臓学会 優秀演題賞	大学院医学系研究科 D3	杜 邱娜	
H27.10. 9	第50回地盤工学研究発表会 優秀論文発表者賞	大学院工学研究科 M2	豊田 智大	
H27.10. 9	第50回地盤工学研究発表会 優秀論文発表者賞	大学院工学研究科 M1	工藤 佳祐	
H27.10.13	Best Poster Award, The 9th International Symposium on Supercritical Fluid Technology (SUPERGREEN2015)	大学院工学研究科 D1	上森 千穂	
H27.10.25	法と心理学会 大会発表賞	大学院環境学研究科 D3	應治 麻美	唐沢 穰 (大学院環境学研究科教授)、 藤本 亮 (大学院法学研究科教授)、 他 1名と連名
H27.11.11	土木学会 平成27年度全国大会 第70回年次学術講演会 優秀講演者賞	大学院工学研究科 M1	南里 卓洸	
H27.11.11	土木学会 平成27年度全国大会 第70回年次学術講演会 優秀講演者賞	大学院工学研究科 M1	伊佐治 優	
H27.11.11	土木学会 平成27年度全国大会 第70回年次学術講演会 優秀講演者賞	大学院工学研究科 M1	大野 優華	
H27.11.12	日本化学会 第5回 CSJ 化学フェスタ2015 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M2	大野 真穂	
H27.11.19	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部主催 “第25回学生による材料フォーラム” 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	村松健一郎	
H27.11.19	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部主催 “第25回学生による材料フォーラム” 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	森本 慎平	
H27.11.21	Poster Award (3rd Prize), 2nd International Symposium on Frontiers in Materials Science	大学院工学研究科 M2	トウ セン	
H27.11.27	プラズマ・核融合学会 プラズマ・核融合学会賞 若手学会発表賞	大学院工学研究科 D3	鈴木 陽香	豊田浩孝 (大学院工学研究科教授)、 他 4名と連名
H27.11.29	Outstanding Presentation Award, International Symposium on EcoTopia Science 2015	大学院工学研究科 M2	南部 裕紀	齋藤 晃 (未来材料・システム研究所教授)、 田中信夫 (未来材料・システム研究所特任教授)、 他 1名と連名
H27.11.29	Outstanding Presentation Award, International Symposium on EcoTopia Science 2015	大学院工学研究科 M2	廣瀬 琢哉	他 3名と連名
H27.12. 1	第20回映像メディア処理シンポジウム ベストポスター賞	大学院工学研究科 M2	末永 諒	
H27.12. 1	第20回映像メディア処理シンポジウム ベストポスター賞	大学院工学研究科 M1	鈴木 貴博	
H27.12. 1	第30回画像符号化シンポジウム ベストポスター賞	大学院工学研究科 M1	近藤 秀	
H27.12. 1	第29回分子シミュレーション討論会 (ポスター発表) 学生優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	畑中 佑太	
H27.12. 1	土木学会 第18回 (2015年度) 応用力学シンポジウム ポスター賞	大学院工学研究科 M2	豊田 智大	
H27.12. 3	Best Poster Award, 8th Plant Biomechanics International Conference	大学院生命農学研究科 D3	平出 秀人	吉田正人 (大学院生命農学研究科准教授)、 佐藤彩織 (大学院生命農学研究科 M1)、 井原邦夫 (遺伝子実験施設准教授)、 松尾美幸 (大学院生命農学研究科助教)、 山本浩之 (大学院生命農学研究科教授) と 連名
H27.12. 6	Poster Award, The 11th International Workshop on Ionizing Radiation Monitoring 2015	大学院工学研究科 M1	水越 友亮	渡辺賢一 (大学院工学研究科准教授)、 瓜谷 章 (大学院工学研究科教授)、 山崎 淳 (大学院工学研究科助教)、 井口哲夫 (大学院工学研究科教授) と連名
H27.12. 7	高分子学会 第46回中部化学関係学協会 支部連合秋季大会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	渡邊 桃加	
H27.12. 7	高分子学会 第46回中部化学関係学協会 支部連合秋季大会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	大野 真穂	

## 受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H27.12.12	平成27年度日本セラミックス協会東海支部 学術研究発表会 優秀講演賞	大学院工学研究科 D1	松田 敬太	乗松 航 (大学院工学研究科助教)、 楠美智子 (未来材料・システム研究所教授) と連名
H27.12.12	第3回先端計測技術の応用展開に関する シンポジウム 学生発表賞 最優秀賞	大学院理学研究科 D2	中川 真秀	笹子宏史 (宇宙地球環境研究所技術補佐員)、 中山智喜 (宇宙地球環境研究所講師)、 松見 豊 (宇宙地球環境研究所教授)、 他1名と連名
H27.12.13	全国大学ビブリオバトル2015～首都決戦～ グランドチャンプ本	文学部3年	河合さやか	
H27.12.13	内閣官房「地方創生政策アイデアコンテスト」 協賛企業社長賞	大学院情報科学研究科 M2	田中 一輝	中村 亮 (大学院情報科学研究科 M1) と 連名
H27.12.14	手塚賞佳作	文学部3年	松見 亮平	
H27.12.16	第16回計測自動制御学会 システムインテグレーション部門講演会 SI2015優秀講演賞	大学院工学研究科 M2	小森 拓真	香川高弘 (大学院工学研究科助教)、 宇野洋二 (大学院工学研究科教授) と連名
H27.12.16	第16回計測自動制御学会 システムインテグレーション部門講演会 SI2015優秀講演賞	大学院工学研究科 M2	小嶋 宏紀	高木賢太郎 (大学院工学研究科准教授) と 連名
H27.12.16	第16回計測自動制御学会 システムインテグレーション部門講演会 SI2015優秀講演賞	大学院工学研究科 M1	松井慎太郎	前田孝雄 (大学院工学研究科研究員)、 原 進 (大学院工学研究科教授)、 他1名と連名
H27.12.19	第15回日本表面科学会中部支部・学術講演会 講演奨励賞	大学院工学研究科 M2	増森 淳史	乗松 航 (大学院工学研究科助教)、 楠美智子 (未来材料・システム研究所教授) と連名
H27.12.21	第19回パターン認識・メディア理解研究会 アルゴリズムコンテスト最優秀賞	大学院情報科学研究科 M1	二宮 宏史	井上卓弥 (大学院情報科学研究科 M2)、 谷川右京 (工学部4年) と連名
H27.12.21	第19回パターン認識・メディア理解研究会 アルゴリズムコンテスト優秀賞	大学院情報科学研究科 D2	原 健翔	他2名と連名
H27.12.21	第19回パターン認識・メディア理解研究会 アルゴリズムコンテスト審査員特別賞	大学院情報科学研究科 M1	向嶋 宏記	加藤大貴 (工学部4年) と連名
H27.12.26	第34回日本糖質学会 ポスター賞	大学院生命農学研究科 M2	新美 百希	羽根正弥 (大学院生命農学研究科 D3)、 北島 健 (生物機能開発利用センター教授)、 佐藤ちひろ (生物機能開発利用センター准教授) と連名
H28. 1. 7	Poster Award, 15th Japan-Korea Meeting on Neutron Science	大学院工学研究科 M2	磯野真理子	
H28. 1. 8	名古屋大学博士課程教育リーディングプログラム グリーン自然科学国際教育研究プログラム IGER Annual Meeting 2015 Poster Award	大学院工学研究科 D1	横井 寛生	
H28. 1. 9	NEXT COMMUNICATION FORUM 2015 アプリ 開発 フリー部門 準グランプリ	大学院情報科学研究科 M1	小久保嘉人	瀧本祥章 (大学院情報科学研究科 M1)、 福原慶子 (大学院情報科学研究科 M1) と連名
H28. 1.12	IBM メインフレーム・コンテスト2015 メインフレーム賞 (日本 IBM)	大学院情報科学研究科 D1	朝倉 淳	
H28. 1.19	高分子学会 第27回高分子ゲル研究討論会 優秀演題賞	大学院工学研究科 M1	城地 悠仁	
H28. 1.19	Soft Matter Presentation Prize, Royal Society of Chemistry	大学院工学研究科 M1	城地 悠仁	
H28. 1.20	平成27年度電気・電子・情報関係学会東海支部 連合大会 IEEE 名古屋支部 学生奨励賞	工学部4年	三輪 洋祐	
H28. 1.20	電気学会東海支部 電気学会優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M2	大橋 亮介	
H28. 1.20	電気学会東海支部 電気学会優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M1	滝藤 奨	豊田浩孝 (大学院工学研究科教授) と連名
H28. 1.20	Student Paper Award, 2015's Chair of IEEE Nagoya Section	工学部4年	西納 修一	
H28. 1.20	Student Paper Award, 2015's Chair of IEEE Nagoya Section	工学部4年	宅和 晃志	
H28. 1.20	電気学会 電気学会優秀論文発表賞 B賞	大学院工学研究科 M2	高橋 達也	
H28. 1.20	電気学会 電気学会優秀論文発表賞 B賞	大学院工学研究科 M2	松岡 達矢	

## 受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H28. 1.20	平成27年度電気・電子・情報関係学会 東海支部連合大会 奨励賞	大学院工学研究科 M2	内田 雄基	
H28. 1.20	平成27年度電気・電子・情報関係学会 東海支部連合大会 奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	岡田 浩平	
H28. 1.20	Poster Presentation Award, First International Symposium on Radiation Detectors and their Uses (ISR2016)	大学院工学研究科 M1	松村 基広	
H28. 1.20	Poster Presentation Award, First International Symposium on Radiation Detectors and their uses (ISR2016)	大学院工学研究科 M1	平田 悠歩	
H28. 1.23	「有機分子触媒による未来型分子変換」 第6回公開シンポジウム 優秀ポスター賞	大学院創薬科学研究科 D2	古川 桂佑	
H28. 1.27	NEC C&C 財団 2015年度 C&C 若手優秀論文賞	大学院工学研究科 M2	杉浦 広峻	
H28. 1.27	電子情報通信学会 エレクトロニクスサイエティ 平成27年 電子デバイス研究会 論文発表奨励賞	大学院工学研究科 D1	村手 宏輔	
H28. 1.29	第13回キャンパスベンチャーグランプリ中部 (CVG 中部) 特別賞中部経済連合会会長賞	大学院工学研究科 M2	本馬 知世	斉東志一（工学部4年）と連名
H28. 2. 4	電気学会新エネルギー・環境技術委員会 「若手優良発表賞」	大学院工学研究科 M2	紀藤 翔平	
H28. 2.11	日本知能情報ファジィ学会 東海支部 第40回東海ファジィ研究会 最優秀発表賞	工学部4年	宅和 晃志	
H28. 2.19	第45回日本神経放射線学会 優秀口演賞	大学院医学系研究科 M2	渡辺 智哉	
H28. 2.19	LOD チャレンジ Japan 2015 審査員特別賞 学生奨励賞（大学部門）	大学院情報科学研究科 M1	服部 洋明	兼松篤子（大学院情報科学研究科研究員）、 遠藤 守（大学院情報科学研究科准教授） と連名
H28. 2.19	Excellent Paper Award, 22th Korea-Japan Joint Workshop on Frontiers of Computer Vision (FCV2016)	大学院情報科学研究科 D2	ブラーマストロ クレスナラン	川西康友（大学院情報科学研究科助教）、 井手一郎（大学院情報科学研究科准教授）、 村瀬 洋（大学院情報科学研究科教授）、 他3名と連名
H28. 2.21	第49回フラーレン・ナノチューブ・グラフェン 学会『若手奨励賞』	大学院理学研究科 D3	藤原 美帆	
H28. 2.21	第49回フラーレン・ナノチューブ・グラフェン 学会『Journal of Materials Chemistry A賞』	大学院理学研究科 D3	藤原 美帆	
H28. 2.29	電気学会電力技術委員会奨励賞	大学院工学研究科 D2	森田 圭	
H28. 3. 1	第8回データ工学と情報マネジメントに関する フォーラム学生プレゼンテーション賞	大学院情報科学研究科 M2	胡 晟	
H28. 3. 2	IBM メインフレーム・コンテスト2015 優秀賞	大学院情報科学研究科 M2	胡 晟	
H28. 3. 4	電子情報通信学会東海支部 平成27年度卒業研究発表会口頭発表部門 最優秀卒業研究発表賞	工学部4年	中島 康雄	
H28. 3. 4	電子情報通信学会東海支部 平成27年度卒業研究発表会口頭発表部門 優秀卒業研究発表賞	工学部4年	宅和 晃志	
H28. 3. 4	電子情報通信学会東海支部 平成27年度卒業 研究発表会ポスター発表部門 優秀卒業研究発表賞	工学部4年	大江 良	
H28. 3. 7	電子情報通信学会 フォトニックネットワーク研究会 2015年 フォトニックネットワーク若手研究賞	大学院工学研究科 M2	川瀬 弘嗣	
H28. 3. 8	第12回フォトニックネットワーク研究会 優秀賞	工学部4年	伊藤 圭佑	
H28. 3. 8	第12回フォトニックネットワーク研究会 プレゼンテーション賞	工学部4年	伊藤 圭佑	
H28. 3. 9	日本材料学会東海支部第10回学術講演会 優秀講演賞（学術分野）	大学院工学研究科 D1	服部 隆志	他3名と連名
H28. 3. 9	日本材料学会東海支部第10回学術講演会 優秀講演賞（学術分野）	大学院工学研究科 M1	ムレマ エマニュエル ゴッドウィン	

\*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
1 本学が自動車や航空宇宙産業で全国ブランドになってきたと紹介される	2.16 (火)	読売
2 この道⑧益川敏英本学特別教授：理解されず	2.16 (火)	中日 (夕刊)
3 本間道夫理学研究科教授などの研究グループはコレラ菌の胆汁走性に関わるセンサーの発見および認識機構を解明	2.17 (水)	日刊工業
4 英語で授業へ 教員鍛錬 大学の教職員の英語力向上策例で本学の「授業を英語に切り替えた教員に3万円の手当を支給」が取り上げられる	2.17 (水)	日経 (朝刊)
5 内田 良教育発達科学研究科准教授は組み体操の見直しを検討し超党派議員連盟が文部科学省に提言することについて「段数が低くても事故は起きており、一つ一つ技の安全性を検討するべきだ」と語る	2.17 (水)	中日 (朝刊)
6 家森信義本学客員教授は東海地方の地方銀行について「これ以上、金利のたたき合いをしてもメガバンクには勝てない」と語る	2.17 (水)	読売
7 「なんてんに広がれ宇宙ロマン22 宇宙と社会をつなぐ」開催：20日 福井康雄理学研究科教授が講演	2.17 (水)	中日 (朝刊)
8 この道⑨益川敏英本学特別教授：目利き	2.17 (水)	中日 (夕刊)
9 第32回博物館企画展「ボタニカルアート作品展」「伊藤篤太郎生誕150年ー初めて植物に学名をつけた日本人ー」開催：4日～4月5日	2.17 (水) 3. 2 (水) 3. 9 (水)	朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
10 本学が開発した硬エックス線望遠鏡2台や小型衛星「ChubuSat-2」を載せたH2A ロケット30号機の打ち上げが成功したことについて國枝理事は「これまで思ってもみなかった現象を見せてほしい」と語り、田原 譲理学研究科教授は「今まで見られなかったようなブラックホールも観測できるのが楽しみだ」と語り、山岡和貴同特任准教授は「気を引き締めてミッションを成功させたい」と語る	2.18 (木)	中日 (朝刊) 他2社
11 本学は医薬品に関する研究成果を素早く実用化するための産学連携体制「臨床試験企画推進コンソーシアム(仮称)」を4月をめどに立ち上げる	2.18 (木)	日刊工業
12 この道⑩益川敏英本学特別教授：お墨付き	2.18 (木)	中日 (夕刊)
13 探訪サイエンス：名古屋大学博物館 巨大ドローンがお出迎え	2.19 (金)	日経 (朝刊)
14 この道⑪益川敏英本学特別教授：仁科賞	2.19 (金)	中日 (夕刊)
15 国際開発研究科に半年間の予定で留学中のタイ、カンボジア、フィリピンの学生3人が一宮市のごみ焼却施設などを見学	2.19 (金)	中日 (朝刊)
16 この道⑫益川敏英本学特別教授：空白の10年	2.20 (土)	中日 (夕刊)
17 紙つづて：MRJの強さ 四方義啓本学名誉教授	2.20 (土)	中日 (夕刊)
18 考える広場：組み体操に見る 教育のリスク 内田 良教育発達科学研究科准教授	2.20 (土)	中日 (朝刊)
19 涌田幸宏環境学研究科准教授が昨年エコ商品を開発する授業で杵の販路拡大につながる案を募集し、杵の製造を手掛ける大橋量器が長崎遥子さん本学1年生の開発したアクセサリ入れを採用し商品化した	2.20 (土)	中日 (朝刊)
20 本学は豊川市に所有する「海軍工廠跡地」の一部約6.5haを新たに購入するように市に依頼した	2.20 (土) 2.21 (日)	中日 (朝刊) 東愛知新聞 東日新聞
21 寺川寿子環境学研究科講師らは2014年御嶽山噴火で噴火直前の約2週間に火山活動の活発化で引き起こされた地震の特徴を突き止めた	2.20 (土) 2.21 (日) 2.22 (月)	朝日 (朝刊) 読売 中日 (朝刊) 毎日 (夕刊)
22 本学と東郷町は自立した高齢者を増やそうと健康診断の受診者らを対象に運動機能と認知機能、生活習慣などのデータを集めて分析する研究事業を新年度から始める方針を決定	2.21 (日)	読売
23 「Voter's Gate 一歩踏み出し投票へ」開催：20日 小野耕二法学研究科教授が若者への選挙啓発イベントで講演し「正解はない問題なので、考え続ける第一歩にしていきたい」と語る	2.21 (日)	毎日 (朝刊)
24 村上正隆本学客員教授らはアラブ首長国連邦の研究助成を受け、人工降雨の研究を始める	2.22 (月)	日経 (朝刊)
25 第12回キャンパスベンチャーグランプリ全国大会開催：3月10日 松下 健さん本学大学院生が出場	2.22 (月)	日刊工業
26 この道⑬益川敏英本学特別教授：親孝行	2.22 (月)	中日 (夕刊)
27 本学で「グローバルメディア研究センター」の設立記念シンポジウムがあり、同センター長の中村登志哉国際言語文化研究科教授はドイツ戦争史との比較で「ドイツもかつて湾岸戦争への派兵拒否で批判を浴び、解釈改憲に踏み切った経緯がある」と語る	2.23 (火)	中日 (朝刊)
28 この道⑭益川敏英本学特別教授：ばかやろう	2.23 (火)	中日 (夕刊)
29 私の先生：調査隊で磨かれた 河江肖剰文学研究科研究員	2.24 (水)	中日 (朝刊)
30 この道⑮益川敏英本学特別教授：博士論文	2.24 (水)	中日 (夕刊)
31 平成27年度赤崎賞：安井隆雄工学研究科助教 赤崎 勇本学特別教授が「期待しています」とエールを送った	2.25 (木)	中日 (朝刊)
32 経済観測：正当な評価と報酬制度を 丹羽宇一郎本学名誉博士	2.25 (木)	毎日 (朝刊)
33 この道⑯益川敏英本学特別教授：最後の一つ	2.25 (木)	中日 (夕刊)
34 本学の2次試験が始まり、前期日程の志願者は4719人で倍率は2.7倍	2.25 (木) 2.26 (金)	毎日 (夕刊) 他2社 読売 朝日 (朝刊)
35 河合塾提供の本学2次試験出題分析：英語 小論文 化学 生物 物理 世界史 日本史 地理	2.26 (金)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
36 第11回キャンパスベンチャーグランプリ北海道：優秀賞 山本涼太さん本学大学院生	2.26 (金)	日刊工業
37 濱田道代本学名誉教授をアイシン精機株式会社は6月に社外取締役役に迎える	2.26 (金)	朝日 (朝刊)
38 この道④益川敏英本学特別教授：最大の危機	2.26 (金)	中日 (夕刊)
39 今伝えたい 東海地方のこれから ～グローバル社会の模範エリアへ～ 国際ネットワークを拡充してリーダー人材を育成する 松尾総長	2.27 (土)	朝日 (朝刊)
40 この道⑥益川敏英本学特別教授：予知能力	2.27 (土)	中日 (夕刊)
41 河合塾提供の本学2次試験出題分析：国語、数学	2.27 (土)	中日 (朝刊)
42 紙つぶて：筆を使うこと 四方義啓本学名誉教授	2.27 (土)	中日 (夕刊)
43 この道⑦益川敏英本学特別教授：予言どおり	2.29 (月)	中日 (夕刊)
44 さーくるつながる：KagaQ 科学の面白さ発信 本学の学生らが2011年12月に設立した中高生に科学の面白さを伝えるサークル	2.29 (月)	中日 (夕刊)
45 榎本 篤医学系研究科准教授らグループは、間葉系幹細胞にしか存在しない特有の分子を発見し、「メフリン」と命名した	3. 1 (火)	中日 (朝刊)
46 「ミクロの探検隊ホニュウ類の組織を電子顕微鏡で見よう」開催：4月9日 本学博物館で開かれる	3. 1 (火)	中日 (朝刊)
47 この道⑧益川敏英本学特別教授：突っ切れ	3. 1 (火)	中日 (夕刊)
48 天野 浩未来材料・システム研究所教授が3月31日のプロ野球中日ドラゴンズの公式戦の始球式を務めることが決まり「(LEDが使われているライブビジョンの) 映像が楽しみ。神聖なるマウンドで精いっぱい投げたい」と語る	3. 2 (水)	中日 (朝刊)
49 この道⑨益川敏英本学特別教授：もてなし	3. 2 (水)	中日 (夕刊)
50 山岡耕春環境学研究科教授は2日にインドネシア・スマトラ島で起きたマグニチュード7.8の地震について「プレートの内部で発生した、岩盤が横にずれるタイプの地震で大きな津波は発生しにくい」と語る	3. 3 (木)	毎日 (朝刊)
51 この道⑩益川敏英本学特別教授：どっちだ	3. 3 (木)	中日 (夕刊)
52 石原一彰工学研究科教授らは、ケトン由来の $\alpha$ -シアノヒドリンの触媒的不斉合成法を開発	3. 4 (金)	中日 (朝刊)
53 創業科学研究館竣工記念式典開催：3日 松尾総長は「発展性のある業の基本原理の発見、優れた人材輩出を期待したい」と語り、人見清隆創業科学研究科教授は「目に見える形で成果に結び付けたい」と語る	3. 4 (金)	中日 (朝刊)
54 創業科学研究館竣工記念式典講演会開催：3日 北里大学特別栄誉教授大村 智氏が講演し「一期一会の精神を大事にすることで豊かな生活を送れると考えて」と語る	3. 4 (金)	読売 他2社
55 探訪サイエンス：KEKコミュニケーションプラザ 益川敏英本学特別教授と小林 誠同特別教授の研究が紹介されている	3. 4 (金)	日経 (朝刊)
56 生きものたちの時間 吉村 崇トランスフォーマティブ生命分子研究所教授⑩：体内時計に働く業	3. 4 (金)	中日 (朝刊)
57 愛知県教育委員会教育委員として松本真理子心の発達支援研究実践センター教授が取り上げられる	3. 4 (金)	中日 (朝刊)
58 文学研究科公開シンポジウム「人文学がつなく社会」開催：19日 佐々木重洋文学研究科教授、浅沼修一本学名誉教授が講演	3. 4 (金)	毎日 (朝刊)
59 論点：骨髄バンク 公的支援拡大を 斎藤英彦本学名誉教授	3. 4 (金)	読売
60 この道⑪益川敏英本学特別教授：消える本	3. 4 (金)	中日 (夕刊)
61 この道⑫益川敏英本学特別教授：ダーチャ	3. 5 (土)	中日 (夕刊)
62 東日本大震災5年：科学者の責任 不都合な真実に目をつぶるな 鈴木康弘減災連携研究センター教授	3. 5 (土)	朝日 (朝刊)
63 吉野裕斗さん教育学部附属高校生が「国際支援の現場を自分の目で確かめたい」と独り世界一周に旅立ち、29か国を巡り帰国	3. 5 (土)	朝日 (朝刊)
64 紙つぶて：空冷と水冷 四方義啓本学名誉教授	3. 5 (土)	中日 (夕刊)
65 科学の扉：震災5年の地震学 山岡耕春環境学研究科教授はこの5年間で「プレート境界全体の力学的ふるまいが分かかってきた」と語り、加藤愛太郎環境学研究科准教授は「ゆっくり滑りが起きたからといって必ず大地震につながるとまでは言えない」と語る	3. 6 (日)	朝日 (朝刊)
66 ひと@あいち：復興とは生存権の回復 山崎雅人減災連携研究センター寄附研究部門助教	3. 6 (日)	毎日 (朝刊)
67 核心：組み体操「安全第一」ピラミッド3段 タワー2段 内田 良教育発達科学研究科准教授は日本体育大学教授 荒木達夫氏のピラミッドは3段までが妥当という考えに賛成する	3. 6 (日)	中日 (朝刊)
68 病院の実力：C型肝炎 医療機関別2014年治療実績 本学の治療実績が取り上げられる	3. 6 (日)	読売
69 日経実力病院調査：大動脈瘤 開胸・ステント使い分け 本学の治療実績が取り上げられる	3. 6 (日)	日経 (朝刊)
70 人気広がる「サイエンスカフェ」：学術研究・産学官連携推進本部が開いた第64回名大カフェ “Science, and Me” 「出張「CIRA カフェ」in名古屋 今宵限りのiPS Barが取り上げられ、戸次真一郎研究員は「多彩な内容のカフェを開きたい」と語る	3. 7 (月)	中日 (朝刊)
71 教育発達科学研究科公開シンポジウム「教師教育における研究総合大学の役割」開催：13日 教育学部附属中学校・高等学校の教員らによる事例発表やパネル討論	3. 7 (月)	中日 (朝刊)
72 この道⑬益川敏英本学特別教授：私と猫	3. 7 (月)	中日 (夕刊)
73 インターコンチネンタル・アカデミア開催：7日～18日 野依良治本学特別教授、益川敏英同教授らが講師を務めた	3. 8 (火)	中日 (朝刊)
74 名古屋市は地元ゆかりのノーベル賞受賞者の研究成果や、功績を紹介する記念館を市内に整備し、益川敏英本学特別教授や天野 浩未来材料・システム研究所教授らの講演を想定していることを明らかにした	3. 8 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 日経 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
75 情報基盤センター長に情報戦略室森 健策教授を選出	3. 8 (火)	中日 (朝刊)
76 辻元哲郎本学名誉教授は伊勢湾に最大瞬間風速60メートルクラスの巨大台風が襲来した場合、最悪で2400人が死亡するとの被害予測について「事前避難計画の精度を高めていけば、被害をかなり減らすことができるはずだ」と語る	3. 8 (火)	毎日 (朝刊)
77 観音さまの姿と働き④：変幻自在の化身 万人の身近に寄り添う 中村元東方研究所専任研究員・主事・東方学院講師佐久間留理子氏本学文学研究科博士課程満期退学	3. 8 (火)	中日 (朝刊)
78 この道⑤益川敏英本学特別教授：ごちそう	3. 8 (火)	中日 (夕刊)
79 政府が地方創生の一環として検討する政府機関の移転構想で茨城県つくば市の産業技術総合研究所先進パワーエレクトロニクス研究センターを本学の窒化ガリウム化合物研究と連携体制を構築する方針について愛知県は「機関そのものの移転と異なり非常に残念だが、一定の意義はある」と語る	3. 9 (水)	中日 (朝刊)
80 愛知県が県内の自然や文化、産業などを紹介するイメージ動画「愛知の引力。」を作成し、本学の日本法教育研究センターで上映される	3. 9 (水)	読売
81 この道⑥益川敏英本学特別教授：入院	3. 9 (水)	中日 (夕刊)
82 本学で前期一般入試の合格発表が行われた	3. 9 (水)	毎日 (夕刊) 他2社 読売
83 東山哲也トランスフォーマティブ生命分子研究所教授のグループは植物の雄と雌が出会うための受容体を発見	3.10 (木)	中日 (朝刊)
84 文部科学省が重点支援制度の審査結果を発表し本学は所定の削減分に対する再配分額の割合が100.2%で交付額が増額	3.10 (木)	日経 (朝刊) 他4社
85 本学など東海3県の国立5大学のベンチャービジネスを投資対象にしたファンドを日本ベンチャーキャピタルが設立したと発表	3.10 (木)	中日 (朝刊)
86 松尾総長が班長を務める厚生労働省の「腎臓移植の基準等に関する作業班」は小児から提供された腎臓は小児患者に優先的に移植するようにすべきだとする意見をまとめた	3.10 (木)	毎日 (夕刊)
87 この道⑥益川敏英本学特別教授：原発講義	3.10 (木)	中日 (夕刊)
88 3.11を胸に：経済と安全、隣り合わせ 益川敏英本学特別教授	3.11 (金)	日経 (朝刊)
89 第12回キャンパスベンチャーグランプリ全国大会：審査委員会特別賞 Re:ACT「大学講義に変化を起こすアプリケーション」松下 健さん本学大学院生	3.11 (金)	日刊工業
90 名古屋経済大学と愛知県立犬山高校は地域の教育を向上させるために連携して活動するため同大学学長佐々木雄太本学名誉教授と牛山 豊校長が協定書に調印した	3.11 (金)	毎日 (朝刊)
91 私の駆け出し時代⑦：トヨタ自動車株式会社社会長内山田竹志氏本学卒業生 入社直後に新プロジェクトへ	3.11 (金)	中部経済新聞
92 この道⑦益川敏英本学特別教授：原発の後始末	3.11 (金)	中日 (夕刊)
93 本学の「留学生防災プロジェクト」が協力し、伊勢市の伊勢神宮内宮前のおはらい町で、大規模地震を想定した非難訓練を行った	3.11 (金)	中日 (朝刊) 他2社
94 この道⑧益川敏英本学特別教授：科学と戦争1	3.12 (土)	中日 (夕刊)
95 薩摩義士の物語⑤：神話の創造 羽賀祥二文学研究科教授は木曾三川流域や鹿児島県で語られてきた「宝暦治水」について、明治以降の顕彰の在り方を批判的な立場から検証した論文を2000年に発表	3.12 (土)	読売
96 紙つぶて：寄り添うための数学 四方義啓本学名誉教授	3.12 (土)	中日 (夕刊)
97 ドクター井口のほのぼのクリニック：明るく生きるには勇気が必要 生命への執着 愛知淑徳大学教授井口昭久本学名誉教授	3.12 (土)	毎日 (朝刊)
98 胆管・胆のうがんの実力病院：医学部附属病院の治療実績が取り上げられる	3.13 (日)	日経 (朝刊)
99 吉野裕斗さん教育学部附属高等学校生が国際支援の現場を学ぶため、8ヶ月半の世界一周の旅を終え、12日に帰国報告会を開いた	3.13 (日)	朝日 (朝刊)
100 講演会「スポーツにケガはつきものか？」開催：26日 内田 良教育発達科学研究科准教授が「スポーツにケガはつきものか？子どもと先生の安全・安心を考える」をテーマに講演	3.14 (月)	中日 (朝刊)
101 この道⑨益川敏英本学特別教授：科学と戦争2	3.14 (月)	中日 (夕刊)
102 福井康雄理学研究科教授らのチームは銀河系で形成過程にある新しい巨大星団の中心でできたガス雲同士が衝突しているのを初めて捉えた	3.15 (火)	中日 (朝刊)
103 日本学士院エジンバラ公賞：松岡 信生物機能開発利用研究センター教授	3.15 (火)	毎日 (朝刊) 他4社
104 永井科学技術財団2015年度財団賞：学術賞 大野雄高未来材料・システム研究所教授、奨励賞 犬塚 篤経済学研究科准教授、永野修作工学研究科准教授、研究奨励金 櫻井淳平工学研究科准教授	3.15 (火)	中日 (朝刊)
105 野崎ますみ博物館研究員は名古屋出身の植物学者伊藤篤太郎が書いた手紙がロンドンの英国王立キューガーデンに保管されているのを見つけた	3.15 (火)	中日 (朝刊)
106 名古屋大学留学生会が「留学生のためのバザー」開催に向け、物品を募集している	3.15 (火)	毎日 (朝刊)
107 いまドキッ！大学生：丹羽宇一郎本学名誉博士に聞く就活 大企業に執着せず、気概を	3.15 (火)	中日 (朝刊)
108 この道⑩益川敏英本学特別教授：科学と国境	3.15 (火)	中日 (夕刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

2月10日(水)～5月31日(火)

場 所：附属図書館医学部分館

2階入口ホール

時 間：9:00～20:00(平日)、  
13:00～17:00(土曜日)

休 館 日：日・祝日

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505

## 附属図書館医学部分館ミニ展示会

### 「名古屋のセンパイ！ 大正・昭和編

#### －名古屋大学全学同窓会大学支援事業②－

内 容：明治4年(1871年)の名古屋大学創基から昭和22年(1947年)の名古屋帝国大学が名古屋大学へと改称されるまでの、大学の前身校に在学、在職した著名人に関連する、入手が困難になりつつある古書も含めた図書、文書、写真、絵葉書等によるコレクションを展示公開する



4月5日(火)～5月1日(日)

場 所：中央図書館2階ビブリオサロン

時 間：9:00～21:00

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

大学文書資料室 052-789-2046

## 大学文書資料室パネル展

### 「名大の歴史と現在

#### －図表で見る沿革とキャンパスの145年－

内 容：本学の歴史と現在の概要を図表や地図、写真などを通じて楽しく知ってもらう



4月19日(火)～8月27日(土)

場 所：博物館2階展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日、8月13日～16日  
(6月5日臨時開館)

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

## 第22回博物館特別展

### 「モンゴル大百科－Mongolian Natural History－

[関連特別講演会]

場 所：博物館3階講義室

時 間：10:30～12:00(4/30)、13:00～14:30(6/11)

講演題目：「恐竜時代のモンゴルの気候」(4/30)

講 演 者：長谷川 精(博物館特任准教授)

講演題目：「モンゴルの恐竜の姿勢と生態」(6/11)

講 演 者：藤原慎一(博物館助教)

参 加 費：無料



4月25日(月)～7月29日(金)

場 所：博物館野外観察園  
セミナーハウス2階

時 間：10:00～16:00

休 館 日：土・日・祝日

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

## 博物館野外観察園セミナーハウスサテライト展示

### 「名大の蛾 II. 春～夏の蛾」



4月28日(木)

場 所：減災館1階減災ホール

時 間：18:00～19:30

定 員：100名

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

## 第119回防災アカデミー

講演題目：「日本の命運を握る超高層建築の現状と未来」

講 演 者：鳥井信吾氏(株式会社日建設計構造設計グループ副代表)



# イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**5月21日(土)**

場 所：博物館 2階展示室  
時 間：14:00～15:00  
定 員：200名（立ち見あり）  
参 加 費：無料

## 博物館コンサート NUMCo

### 「モンゴルの心 馬頭琴」

演奏曲目：「スーホーの白い馬」、「草原の祝福」、他  
出 演：サランモル



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**5月25日(水)、11月23日(水)**

場 所：博物館野外観察園、  
博物館 2階展示室  
時 間：13:00～15:00  
参 加 費：無料

## 博物館野外観察園見学会

講 師：西田佐知子（博物館准教授）、野崎ますみ（同研究員）  
内 容：季節の花をみながら自然を学び、電子顕微鏡でミクロの自然を見る



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**5月28日(土)、6月4日(土)、6月25日(土)**

場 所：博物館 3階講義室  
時 間：10:30～12:00  
定 員：80名  
参 加 費：無料  
対 象：一般(基本的に毎回参加できる方)

## 達人と話そう おもしろ博物館

講演題目：「名古屋大学のあゆみと地域社会」(5/28)  
講 演 者：吉川卓治（教育発達科学研究科教授）  
講演題目：「謎の原始生命—30億年前の秘密—」(6/4)  
講 演 者：杉谷健一郎（環境学研究科教授）  
講演題目：「生物遺骸を保持する“タイムカプセル”  
—球状コンクリーションの謎に挑む—」(6/25)  
講 演 者：吉田英一（博物館教授）



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**6月2日(木)～5日(日)**

場 所：東山キャンパス

## 第57回名大祭

内 容：サークル・有志団体の発表企画、研究室公開、学術企画、スポーツ企画、  
模擬店、フリーマーケット、古本市など170余りの企画を実施

[問い合わせ先]

教育推進部学生交流課 052-789-2164

名大トピックス No.275 平成28年4月15日発行  
編集・発行／名古屋大学総務部広報渉外課  
本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。  
名古屋市千種区不老町（〒464-8601）  
TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ（<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/publication/index.html>）でもご覧いただけます。

表紙  
練習風景  
（民族舞踊団 首舞）  
（平成28年3月16日）



## 168 農学部の安城からの移転 — 学部の東山集結50周年 —

現在の名大は、医学部は鶴舞キャンパスと大幸キャンパスにありますが、それ以外の8学部は東山キャンパスに所在しています。このような形になったのは、ちょうど50年前の1966(昭和41)年4月のことです。

戦後初期の名大は、学部の所在地だけでも、東山、鶴舞のほか、名城(文、教育、法学部)、桜山(経済学部)、安城(農学部)、高蔵(工学部の一部)に分かれており、「たこ(の)足大学」などと呼ばれていました。それが、1950年代後半から徐々に東山への移転が進み、最後に残ったのが農学部でした。

農学部が最後になったのには理由がありました。それは1951年に農学部が設置された経緯です。農学部の設置には、附属農場をはじめ多くの実習・実験施設が不可欠であり、名大はその確保に苦しんでいました。そこへ名乗りを上げたのが、「日本デンマーク」と呼ばれた安城市(当時は安城町)だったのです。

通信手段が未発達であった当時、他学部との交流が難しいことは、農学部の教員と学生の大きな不満となっていました。しかし、設置にあたって全面的な協力をあおいだ安城市との関係があり、移転構想はあっても公にはしづらく、なかなか具体化しない状況が続きました。

そうした状況が動き始めたのは、農学部設置当時から在職していた大見為次安城市長と勝沼精蔵名大総長がいずれも職を離れた1959年からです。1960年に移転計画を公表し、安城市の理解を求める努力をした結果、1961年12月にはその承諾を得ることができました。

その後も、安城の跡地の処遇や、豊川の附属農場(東山の新校舎建設費の予算化のため国へ提供)に代る農場の確保の問題が持ち上がりましたが、跡地は安城市へ無償譲渡、附属農場は愛知県愛知郡東郷村(現東郷町)の農林省試験地を取得できることになりました(現在のフィールド科学教育研究センター東郷フィールド)。



1	2	3
4	5	

- 1 整地された農学部建設用地。写真中央に本部棟と職員会館が見える。
- 2 建設中の農学部校舎。1965年4月に着工し、1966年3月に完成した。
- 3 完成した農学部校舎(1966年)。当初建てられたのは、現在のA館、管理棟、講義棟。
- 4 農学部校舎完成直後の東山キャンパス(『名古屋大学概要』1966年度版より)。
- 5 農学部管理棟の前にそびえたつメタセコイア(中央)。1966年の移転時に安城キャンパスから移植された。最初は、第1回卒業生によって植樹された1mほどの苗木であった。